

始



325

341

325-341

修養
と
信仰

大正
4. 2. 3
内交

序

日本佛教を經とし、修養と信仰とを緯として、此一編を織出したるなり。兩三年來、河内越前筑前等各處に於て講演したるものにして、此編は當時講話の筆録に係る。故に文字頗る冗長蕪雜の嫌ひなきにあらずと雖も、その説く所極めて平易通俗にして佛教の素養なき人にも一讀

了解し得べし。今回東亞堂の請によりて之を世に公にすることとしぬ。意ふに今や吾國民は稍日本を自覺するの時期に入れり。此編萬一其修養と信仰に資することを得ば幸甚。

大正三年十二月

著者識

修養と信仰——目次

第一 緒言……………一

心の落付……井伊掃部頭……楠正成……明治天皇の軍人詔勅の御精神
 第二 總論……………二

印度支那日本三國佛教の發達の異點……印度人の厭世の意義……日本人の長所短所……宗教の本旨……宗教と倫理道德との異點

第三 印度の佛教……………六

佛教現象論の主旨……天地萬物皆無常……文明も遂には亦滅亡に歸す

……吾人の樂觀悲觀は皆境遇に支配せらるゝ結果……無常の世界を超越するの法

第四 支那の佛教(上)……………六

佛教本體論の要旨……支那人は理想に長ぜり……常樂我淨の四顛倒心……小乗の非常非樂非我非淨

第五 支那の佛教(中)……………六

大乘の常樂我淨……本體即ち眞如……無限絶對……圓滿圓融……事情即ち因縁……佛……淨土……眞理は事實、事實は眞理……修養の必要……修養せざれば鬼になる

第六 支那の佛教(下)……………二六

物の眞味は實際に當られば分らぬ……現實と理想との一致……煩惱即菩提……戒定慧……旋渦底の佛……大乘の修行は羅漢以上の仕事

第七 日本の佛教(一)……………二五

聖德太子に就ての總述……………二五
日本に哲學なし……實行の發達……世間即佛法……妙法蓮華……鎮護國家……篤敬三寶……是人名芬陀利華

第八 日本の佛教(二)……………二七

聖德太子興隆三寶の主旨……………二七
佛教傳來に二系統あり……裸行上人……役行者……泰澄和尚……百濟王の貢物……興隆三寶の主旨は鎮護國家に在り

第九 日本の佛教(三)……………一八五

聖徳太子の十七憲法……………一八五

以和爲貴……………徳教と法律との矛盾……………矛盾の源は胸中の不調和に在り
……………胸中の調和は篤敬三寶を要とす

第十 日本の佛教(四)……………二二五

聖徳太子弘教の外面形式及内的信仰……………二二五

非僧非俗は既に太子の上に在り……………親鸞聖人は純粹の僧侶にはあらず
……………眞宗の僧侶も亦純粹の僧にはあらず……………四天王寺の組織……………佛法
の鎮護國家となる所以は其源信仰に在り……………太子の信仰は往生淨土……………
……………法隆寺三尊光背の銘……………天壽國曼陀羅……………觀音と彌陀

第十一 日本の佛教(五)……………二三五

聖徳太子講説の經典及其内容……………二三五

三經義疏……………太子の親撰……………惠慈惠聰は涅槃宗……………法華内容の大意……………
……………衣坐室の三軌……………維摩經の大意……………勝鬘經の大意……………十大受の大意

第十二 日本の佛教(六)……………二六六

法華經の精神と他力念佛……………二六六

報恩の心は自然法華の三軌に契ふ……………篤敬三寶の極致は親鸞蓮如兩師
に至て明白となる

第十三 日本の佛教(七)……………二七六

宗教の本旨……………二七九

未來的の信仰……………現在のの信仰は眞の信仰に非ず……………死に就ての修養

第十四 日本の佛教(八)……………二九九

佛教教理と國家道德……………二九九

正義と忠孝……………平等即差別……………差別中の差別……………主伴……………親疎……………遠近……………厚薄……………人倫……………各國成立の差別……………國家的なると共に世界的……………差別の現るゝ事情には横的と豎的とあり……………君臣親子夫婦等には世々生々の關係あり

第十五 日本の佛教(九)……………三三三

篤敬三寶の極意……………三三三

佛法僧の三寶は一の佛寶に歸す……………如來に調伏せられて信樂心を生ず……………他力の信仰は法性の源底に徹す……………三種の善男子善女人……………信仰はたゞ佛語を信するに在り……………現今世間の學説は佛教の理に達する中程に在り

第十六 日本の佛教(十)……………三五五

傳教大師の大乗圓頓戒……………三五五

聖德太子以後の佛教狀態……………延暦の改革……………傳教大師の天台宗……………聖德太子佛法の再興……………小乗戒と大乗戒……………圓頓戒壇の建立旨趣

第十七 日本の佛教(十一)……………三七三

平安朝佛教の狀態……………三七三

慈悲大師頃の狀態……物質の極盛は精神の衰へなり……空也上人……
源信和尙……良忍上人

第十八 日本の佛教(十二)……………三八

親鸞聖人の眞宗……………三八

法然上人の念佛……親鸞聖人の念佛……賀古の教信沙彌の定なり……
……御同朋御同行……宗教的自覺……倫理的信仰と超倫理的信仰

目次畢

修養と信仰

文學博士 前田慧雲 著

第一緒言

此度は修養と信仰と云ふ項下に、日本佛教の話を致す考である、日本佛教は元來どの様にも話が出来、長く話も出来れば短く話すことも出来る、或は極く小六ヶしう、學問風に話すことも出来る、或は極く平たく修養風に話すことも出来るものであります。今度は極平く修養風且信仰的に話を致す考である。

近來、ドコもかも、精神界の事に就ては大分氣が付いた、所謂自覺が出来かけたやうであります、以前とは大分振合が變つた、精神上の事を好んで聴く方が追々出来て參つたことでもあります、その精神上の話に就きましても、矢張り宗教の信仰上から話する方が、皆さんが熱心にお聴になるやうな風になつて居る、至極結構なことである、人間として、何が一番大事のことであるかと申すと、精神の落付きと云ふことが、これが一番大事であらうと思ふ、心の落付きと云ふ事、心に極りの出来る事が、一番大切なことであらうと思ふ。

今日世に處して仕事を致して行くに就きましても、又自身が不幸に出遭つた、病氣に罹つたと云ふやうな場合に臨んで、心の落付きが確かり出来て居らぬと云ふと、うろたへて、思はず知らず詰らぬ事に陥つて行くやうなことがあるものなんです、どうして

も茲に心の落付きを一つ拵へて置かなければならないことであらうと思ふ、其の心の落付きを拵へるには、矢張り宗教の信仰、宗教の信仰が確かり出来てさへあれば、夫れで自身の心の落付きが付くのである、頭の極りが付くのでありますからして、日々の仕事をして行く上に就て、或は不時な災難に出遭つても、病氣に罹つても、うろたへず、其の場を通り抜けることが出来ることであらうと思ふ。

御承知の舊の彦根の殿様、井伊掃部頭様、櫻田門で暗殺せられたお人であるから、誰も知らぬ者はありませんが、先達でもあのお方の事を精く調べた人の、話を聞きました處が、あのお方は大變な佛教信者、佛教信者と云ふよりも寧ろ、佛教を本當に修行した人である、夫れで大老になられて、御維新前仕事をせられたのも、皆自身が平生修行をせられた佛教が元になつて居るのである、表にはさう現はれて居らぬやうであるけれど

も、段々調べて見ると、何から何に至るまで、佛教の信仰が根柢となり、自身が修行した其の腹が皆土臺となつて出来て居るやうなことであると云ふことです、あれは元と、彦根の殿様の次男か三男であつて、昔言ふ冷飯であつた、夫れで兄様が殿様であらせられた頃と云ふものは、随分冷遇を受けた、これは以前冷飯と云ふ名前が付いて居るやうなことでありますから、大名でも華族でも、弟に生れると云ふと、極く詰らぬものである。夫れで冷飯と云ふ名があるのであります、今日から考へて見ると、華族さんの息子さんであり、一國の殿様の息子さんと言へば、長男でも次男でも格別異らぬ結構な日暮しをせられたものであらうと思はれるが、實際はそんなものではない、餘程長男と次男との間に間隔のあつたものである、掃部頭様も冷飯で在りなかつた時分には、生活に難儀をすると云ふやうなことはありませんけれども、餘り結構なお暮し方ではなかつた

らしい、さう云ふ所からして、自身が佛教の修行をしようと思ふやうな考へが起つたものと見える、恰度其の時に御菩提所天寧寺に英仙と云ふ和尚があつた、此の人は中々出来た人で、餘程禪宗の方の修行の力のあつた人らしい、夫れから本派の御連枝でありまして、今も即ち御連枝であらせられるのですが、息長の福田寺が、當時の彦根公の従兄弟か何かであつた、これが御連枝ではあるけれども、中々出来たお方、餘程學問のあつたお方で、其の人の書かれた書物がある、夫れは先達で、東京の史料編纂所へ、一纏めに纏めて送つて参りました、で私に見ないかと言つて寄越しましたが、まだ今日まで見えに行きませんが、何んでも餘程澤山あるさうです、眞宗のお經の註釋まである、餘程學問があつたお人と見える、そこで此の井伊掃部頭様は、英仙和尚と、福田寺の御連枝……攝專とか何とか申しました、此のお二人に就て、佛法の學問修行をせられた、其

の中にも、最も深く天寧寺の英仙和尚に就て禪宗の修行をせられた、今日でも禪宗の坐禪などは餘程流行るやうであるけれども、今日の禪宗の坐禪の遣方と云ふものは、どう云ふ所から遣るのであるかと云ふと坐禪をすると身體が良くなるとか、心胸が廣くなるとか、そんな所から坐禪をして見やうと云ふ人が多くなつたのである、けれどもそりやア禪宗の本意ぢや無いのです、胸が廣くなるとか、身體が好くなるとか言ふ位の事は、坐禪ぢやなくとも、外に遣方は澤山ある、禪宗で坐禪をする、禪宗で修行をすると言ふのは、そんな小さい動機から起つたものではない、所謂自身が今度佛にならうと云ふ所から出立して、どうぞ此の迷ひを出て悟りに入りたものであると云ふ所から、坐禪をする、夫れであるから即ち佛法である、唯だ胸が廣くなるとか、身體が好くなる杯と云ふ動機では佛法とは言へない、けれども今日は、禪宗の坐禪を遣つて見やうと云ふ人は、多くは夫

である、然るに此の井伊掃部様の坐禪はさうでなかつた、本當に修行する積りで遣つた、夫れで前後恰度十二年の間、雲水同様になつて本當に修行をせられた、遂にはどうやら坊主になる積りであつたさうです、自身も本當に頭を剃つて僧侶になるお積りであつた、其の位であるから、慰みに坐禪をするのではない、眞劍に坐禪をせられた、そこで餘程坐禪の方が出來た、其の外に、福田寺の御連枝から、眞宗の方も話を聞き、或は外の學問の講釋をも聞いて、佛法の事は、中々廣く深く研究されたのである、井伊掃部様の書かれた佛法論と云ふものがある、餘り長い物ではありませんけれども、凡そ二三十枚もあります、夫れを見ますと、井伊掃部様の佛法に對する御意見が分るやうであります、マアさう云ふものを自身に書いて置かれた位でありますから、餘程深くあつた、然る處其の兄様が亡くなられた、自身が其の跡を取らんければなら

ないやうになつて、遂に彦根公になられた、さうすると時の幕府から召されて、遂に大老職となられたことである、其の大老職になられてからも前に申す如く、何から何に至るまで、是れまで修した處の禪宗腹が元になつて、即ち佛法で事を極めて行く、日々出勤をせらるゝのに、毎日自身が官服を着けて、これから役所へ出勤をしようといふ場合になると、表玄關に駕籠を待たせて置いて、官服を着けたなり御先祖の位牌へ参る、佛壇に向ひ御禮をして、どうぞ御加護を下されたいと言つて丁寧な禮拜した後、駕籠に乗つて出掛ける、夫れから日の暮れに歸ると、玄關を上るが早いか、官服を着た儘で、佛壇の前先祖の位牌に詣で、今日もお蔭によつて無事に済ませて頂きましたと言つて、お禮を述べる、夫れが毎日々々少しも缺けたことがなかつた、夫れから考へて見ると云ふと、毎日役所へ出て仕事をするのは命懸けであつた、今日限りと云ふ心懸けであつた、明日と云ふ餘裕は持つて居らなかつた、何時どのやうな災難に遭はうやら、何時首を取られるやら分らぬ、斯う云ふ決心で役所へ出たれば、今日は家へ歸る歸らぬはソコは豫期しない、さう云ふ心持ちで毎日々々政事を執つて行かれたものと見える、萬事さう云ふやうな具合で、總て皆佛法が腹の据りになつて政治をして行かれたと云ふことである。

夫れで浦賀へ亞米利加の船が二度目に遣つて来た、其の時恰度掃部様は彦根へ歸つて居られた、さうすると江戸からして、早飛脚で注進が来た、これにはマア自身も餘程困られたやうである、初めに来た時には好い加減に具合よう言つて、ごまかして歸して了つた、が二度目に遣つて來られては、モウ初めのやうに好い加減なことで茶を濁して歸すことは出来ない、向ふが承知しない、明かに條約を結ぶか、或は開港場を開くか、何と

か向ふの要求を容れなければならぬ、向ふが歸らぬ、コチラも歸して遣れぬと云ふ場合になつた、そんならと言つて、其の當時は國論が非常に沸騰して居つて、若し亞米利加に對して條約を結ぶとか、貿易を開くとか云ふやうなことになる、内輪は大騒動になる、餘程これには困られたものと見える。

そこで其の時に誰れに其の事を相談せられたかと云ふと、一番驅けに英仙和尚に相談をせられた、其の手紙が出て來て居る、夫れから英仙和尚から來た所の返事も残つて居る、井伊家から出て來た、これが、餘程面白い所であらうと思ふ、お互に餘程考へなければならぬところであらうと思ふ、英仙和尚は禪宗の和尚さんである、坐禪の事なり力もありませうけれども、亞米利加の船と應接すると云ふことになつては、少しも知識がある人ぢやアない、經驗のある人ぢやアない、今で申すと外交の事、外交の事に就て

は知識のある人ぢやない、經驗もない、唯だ坐禪がえらかつた、禪宗の修行が出來て居ると云ふだけのことである、ところが今其の外交の事柄に就て、前申すやうな極く困難な外交事件が発生したと云ふ場合に當つて、外の人には相談をせず、第一番に禪宗の和尚さんに相談したと云ふのは、どう云ふ所であらうか、茲にも商法を爲されるお方がありませうが、商法上自身が大變な難儀な事が起つた、或は大失敗が出來た、非常に六ヶしい事が起つた、自身の進退維れ谷まると云ふ場合になつた時には、誰れに其の事を相談するか、ソコを以て考へて見たら、大抵此邊の味ひは分るであらうと思ふ、大抵な人であるならば、商法上の事件が起つたならば、商法上經驗のある、早く言へば金のある人に相談に行くに違ひない、又自身が大變六ヶしい病氣に罹つたと云ふ時には、誰れに相談に行くかと云ふと、矢張りお醫者さんの方へ相談に行く、して見ると、政治

上困難な事が起つた場合には、矢張り政治上の経験あり知識ある人の方へ相談に行かんければならない譯である、またさうすべきが通例であらう、夫れから井伊公は大老職である、其の下に、御老中と云ふ人が幾らもある、其の中には随分外交上の経験のある人もあらうから、夫れに相談に行くと云ふのが通例であるのに、先づ第一に英仙和尚の方へ相談に行つたと云ふのは、どう云ふ譯であらうか、どう云ふ處からさう云ふことをされたものであらうか、茲が即ち餘程肝要な所で、又面白い處である。

そこで英仙和尚は一體どう云ふ返事をされたかと云ふに、英仙和尚の返事も亦面白い、通例の坊さんであると、そんな事の相談を掛けると、夫れはマア御心配であらうけれども、私にはネツカラ経験がありませんから、何んとも申して見やうがありません、乍併國家の爲めには一大事件でありますから、折角御心配下されたい、と云ふ位な挨拶よ

り仕やうがありますまい、大抵な坊さんなれば、さう云ふ返事をするであらうと思ふ、ところが英仙和尚が彦根公へ送られた返事はどうであつたかと云ふと、随分長い書面であつたけれども、極く掻い摘んで申すと云ふと、今度亞米利加から船が來た様子である、其事に就いては段々御心配の事であらうが、併し斯う云ふ場合に當つての心掛は、あなたはモウ既に御修行が済んである筈である、斯う云ふ大困難の場合に當つて處する心掛は、御自身の上で既に御修行が済んである、今となつて何んと云ふうろたへ方ぢやと、強く言ふと叱り付けられた、文言は優しい文言であるけれども、其の意味合を搔摘んで言ふと、そんな事はお前、ハヤモウ是れまで永らくの間坐禪をして、自身の腹の極りが付いて居る筈である、夫れに今頃ウロ／＼乃公の所へ尋ねて來るとは、どう云ふうろたへた事ぢやと、云ふやうなる返事である、そこで此の井伊掃部様の腹が据つた、如何に

もさうぢやとお氣が付いた、夫れから直ぐに早駕籠に乗つて、江戸へ飛んで行つて、應接をした、其の應接振りは、歴史上から調べて見たら、段々詳しいことも分るでありませうが、我々は一向調べたことがありませんから知りませぬけれども、鬼に角其の時の應接は、自身が死ぬとか生きるとか、或は自身の都合が良いとか悪いとか、さう云ふ死生榮辱と云ふことは忘れて了つての應接であつたであらうと思ひます、若し自身の腹が極まらず、之れを遣り損つたらどうなるだらうとか、斯う云ふ應接をしたら暗殺をせられるだらうとか、言ふやうな、心があつたなれば、其の時に十分な應接は出来るものではない、宛るで死生榮辱に就ては無頓著である、そんな事柄は少しも念頭に置かず、唯だ國家と云ふ事を心に置いて遣つたのである、夫れで立派に交渉が出来たであらうと思ふ、已に第一番に禪宗の和尚さんにさう云ふ事柄を相談掛ると云ふのが、頭から外

の入とは異つて居る、自身が平生坐禪などの經驗がないものであるならば、其處に氣が付かない、平生自身がソコに段々修行が積んで居つたから、これは和尚に聞いて見よう、どう云ふ應接をしたものであらうかと、英仙和尚に尋ねたところが、英仙和尚は頭から吐り付けたので、ヤツこれは茲である、是れまで修行をしたのは茲であると云ふ所に氣が付いた、そこで自身の死生榮辱禍福と云ふことは棄て、了つて、唯だ國家と云ふことのみを以て應接する事になつたのであらうと思ふ、即ち此の六ヶしい問題を解決することが出来たのである。

これは井伊さんばかりではない、今日お互ひが矢張りこれで行くまいと思ふ、腹が据つて居らんければならぬ、其の腹が据るのは矢張り宗教である、そこで宗教の信仰のある者であつて見れば、商賣の上に就て困難な事が出来ても、自身の家庭に於て六

ケしい事が起つても、或は自分の親の病氣に出遭うた時、自身が病氣に罹つた時、先づ第一に誰れに相談をするかと云ふことが、一番大切な事であらうと思ふ、即ち腹を極めて掛ると云ふことが大切である、腹が極らぬとろたへる、うろたへるから失策をする、可愛い子供が病氣になる、大切な親が病氣であると云ふ時には、お医者さんに相談する、そこでお医者と言ふ口が、アチラとコチラと違ふと云ふやうなことになる、夫れを又判断せんければならぬ、其のうちに、弘法さんのお水が良いと云ふやうな話を聞くと、一つ飲ませて見ようかと、云ふやうな考へが起る、稻荷さんのお札が良いと聞けば、夫れを受ける氣になる、うろたへ廻るものであるから、取り留められる命も到頭取り留められずアツタラ命を棄て、了はんければならぬと云ふことになる、夫れは他縣には澤山ある、本縣などとはどうか知りませぬが、東京などには、さう云ふ場合に陥つて居る者が

中々澤山ある、岡目からは、今あんな馬鹿なことをしては何んにもならぬ、お医者さんの藥を飲めば直るがと思つても、うろたへて掛ると人の言ふことは耳へ這入らぬ、到頭全快する者も全快せずして死んで了ふことになる、であるからどうしても心の据わりを付けて掛らんければならぬ。

段々昔しの偉い人の事蹟を調べて見ると、皆んな掃部様と同じやうである、何か大事に出遭ふと云ふと、イツでも其の處分法を宗教の方の側の人に相談を掛ける。

北條泰時と云ふ人は、北條九代の中で立派な人で、朝廷へ對しては不都合な事が澤山あるけれども、政治向きに就ては中々立派なもので、北條九代の中の一番と言はれた位な人である、其の位出來た人であるが、自身が政事を執ると云ふ時に、誰れに第一に相談をしたかと云ふと、明恵上人であつた、禪尾の明恵上人に向つて、私は

是れから將軍の執權として天下の政治を執らんければならぬことになりましたが、如何にしたら天下を治めることが出来ませうか、如何にしたら民を治めることが出来ませうかと、相談をせられた、明恵上人はイヤ夫れは六ヶしいことはない、あなたが慾を離れたら宜い、あなたが慾を離れたら、下は皆治まることである、斯う云ふことを言はれた、そこで其の御説示の通り自身が實行した、よつて其の一代の間と云ふものは誠によく治まつた、自分の家は、表の門や垣は破れて傾いて居つたやうな有様であつたさうであるけれども、政治向きは能く行届いた。

又其の孫の北條時宗なども、元の兵隊が博多灣へ攻め込んで来て、世間は大騒になつた、にも拘はらず時宗は知らぬ顔して坐禪をして居つた、世間が大變騒いでも、一向自身には分らぬやうであつた、其の位の修行であつたんですから、到頭あの元の兵を打ち破ることが出来たのである。

楠正成公もさうである、モウ今度は討死をせんければならぬと云ふ場合になると、兵庫の廣嚴寺へ行つて、明極和尚に相談を掛けた、さうして和尚の一劔天に倚つて寒し、との垂示によつて自身の心が据つて到頭討死をせられた。

徳川家康公もさうである、三河の大樹寺へ這入つて切腹をしようとなされた、すると大樹寺の登譽和尚から説法を聞いて、思ひ止まつた、今頃ウロ／＼と／＼つくのはいくぢの意久地のないことであると叱り付けられて、何時自身は死んでも浄土へ參ると、其處に腹を極めて、兜の中に御本尊を入れ、片方の手にて念珠を持ち片方の手にて軍扇を以て、手勢僅か三百人を引伴れ、念佛を唱へながら何萬と云ふ軍中に斬り込んで却つて捷利を得られた。

こんなやうな具合で、昔の英雄豪傑を能く調べて見ると、井伊掃部様ばかりでなく、誰れも皆さうである。

昔の武士道と云ふ……徳川時代の武士道は少し振合ひが違ひますが、徳川以前の武士と云ふものは、皆んな佛法で出来て居る、佛法で腹を極めて居る、佛法で、死ぬ生きると云ふとは何とも思はぬと云ふやうに練り上げて、夫れで立派に主人の馬前で討死すると云ふことが出来たのである、總て此の腹の極ると云ふことが一番大切なことである、其の腹の極りは何によつて出来るかと云ふと、夫れは佛法に限るとは申さない、乃木將軍のやうな人もあり、吉田松陰先生のやうな人もあるから、強ち佛法でなければならぬとも申さないけれども、乍併本當に奥底まで心の極ると云ふのは、矢張り佛法の信仰でなければ行くまいと思ふ、外の方で腹の極つたのは消極的で、早く言へば「仕

様がな」と云ふ、斯う云ふ場合には斯うすべきものであるが、仕やうがないと、斯う云ふことになつて了ふ、宗教の方で極つた腹と云ふものは、積極的に行くのです、仕やうがないと言ふばかりではない、是れで自身は佛に成る、今度は是れで淨土詣をする、斯う云ふ積極に向いて行くのである、そこで腹の据り方も餘程味ひが違ふことになる、夫れで本當に腹の極まるのは、矢張り宗教の信仰でなくては出来難いことであらうと思ふ、宗教を信仰すれば、腹が極まる極まらぬ、そんなことは心に思はんでも、自然に腹が極まるんです、夫れであるから、親の病氣に出遭はうとも、子の病氣に出遭はうとも、さううろたへずに、これは因縁事である、乍併自身の手の及ぶ限りは盡して見ようと思ふことになる、お医者さんにも十分掛けて、お医者さんの薬によつて、介抱の出るだけはすると云ふことになる、稻荷さんに頼みに行かうとか、弘法さんに頼みに行

かうとか云ふやうな、そんなうろたへた心は起らぬのである、で却て病氣が全快をする、どうしても腹の極まるのは、宗教の信仰の上から行かんことには、十分なことは行かぬだらうと思ふ。

此の夏廣島縣を廻りまして、高田郡へ參つた時が恰度八月の八日であつた、其の時は其の近邊の兵の點呼であつた、私の話を聴きに來る所謂會員の一人でありましたが、其の人も矢張り其の時に點呼に出た、翌日に私の所へ來て話をせらるゝのに、今度の點呼は、實にどうも珍らしい點呼でありました、私は日露戰爭に兄弟三人出まして、弟二人だけは討死をした、私一人だけが無事に歸りました、弟が極く慘酷な目に出遭つて討死を致した、自身一人だけが残つたと云ふことに就て、佛法の事を大いに有難く喜ぶ次第である、夫れ以來毎年々々點呼に出ましたが、其の點呼に出る時には私

は、通常の服を着て出た、今年に限つて、通常の服を着るよりか、我々は坊主である、坊主の法衣を着て行かう、若し向ふから何か咎めたら言つて遣らう、斯う云ふ心があつて法衣を着て出ましたところが、私の法衣を着けたのを咎める所ではない、總ての者をズツと列べて點呼して、向ふの出張員が申されるのに、

時にお前方は、明治天皇が軍人に賜つた所の五ヶ條の御誓文、あの御精神をどう戴いて居るか、一つ茲で言つて御覽なさい、あの明治天皇の、軍人にお下しになつた所の詔の御精神はドコにあるのであるか、どう戴いて居るか、文章の上の事を尋ねるのではない、御文句の上の話をせいと言ふのではない、あの御精神、ホントの御精神は一體どう云ふ處にあるのであるか、お前方から戴いて居る所を聞かせて貰ひたい。

斯う言つた、暫く経つても誰れも言ふ者はない、そこで、

お前達は何んとも言はないから乃公が言うて聞かせる、あの五箇條の御誓文と云ふのは外の事ではない、精神の上から言へば、お前等が佛様を本當に有難いと信じたら、あの御精神に適ふ、お前等が佛法を聞いて、本當に阿彌陀様が有難い、本當に佛様が有難い、とさへなりやア、あの 明治天皇のお下しになつて居る 詔の御精神に適ふのである、どうぞこれからお前等は、小六ヶしい事を言ふには及ばぬ、理窟臭い事を言ふにも及ばぬ、どうぞ此の如來様を本當に有難く信じて呉れ、如來様を有難く信じさへすれば、御精神に適ふのである。

斯う云ふ言渡しであつた、これまでそんな事と云ふものは、一たびも聞いたことがない、今度は誠にどうも有難いことでありましたと、斯う云ふ話であつた。

これは私は餘程要領を得た人であると感服した、其人は廣島の聯隊の何某と云ふ人であることであつたから、歸り路に廣島へ來た時に訪ねて見た處が、夫れは先月外へ轉任をせられた、ツイ四五日前に立つて行かれたと云ふ後であつた、私は能う遇はなんだ、長州の人であるさうで、其の人は佛法の信仰のある人でありませう、信仰がなければ言へる譯ではないが、兎に角廣島地方の兵に對して諭すには、極く適切な言ひ方である、極く要領を得た言ひ方である、眞に其の通り、言葉の上から言へばチツとをかしいと云ふことがあるかも知れぬけれども、本當の精神上から言へば、佛様が本當に有難いとなりやア、天子様の御恩もソコに自然に思ひ浮かべることになる、如來様の御慈悲が本當に有難い、この慈悲によつて、永らくの間の迷ひの纜を切つて、今度こそは眞の悟りに入らさせて戴くのぢや、有難い、其の上からして天子様の御恩を喜ぶと云ふこと

になれば、一層御恩を深く喜ばれるのである。其の深い御恩を喜ぶ所があればこそ、まさかの時に自身の生命とか財産とか、そんな事は顧みないやうになる、自身の身の上にて都合が好い、自身の身の上にて都合が悪い、そんな御恩の喜び方なれば、まさかの時には何んにもならない、夫れが世間に多い、けれども、佛様の御慈悲が本當に有難いとなつて、永らく、無始以來迷うて来たが、此の度こそは迷ひを離れて、眞の淨土詣り、本當に悟を開かせて貰へる、モウ再び迷ふ氣遣ひのない身の上にして戴いたと云ふのは誰れのお蔭であるか、如來様のお慈悲は無論の事であるが、其のお慈悲を聞いて喜ぶ身の上にして下されたのは、全く天子様の御恩であると、ソコに天子様の御恩を喜ぶことになれば、自身の命も財産も、まさかの時には惜しい譯はないのである、茲から昔の立派な武士道は出て来て居る、ぢやからして、本當に佛法が有難くなり、佛様の

お慈悲が有難いとさへなつたなれば、明治天皇のお下しになつた御詔勅の精神に無論適ふのである、でこれは廣島縣邊りで言うて聞かせて、誠に適切な言ひ方であると私は感服したのである、乍併自身に信仰が無くては如此の言は口から出ない、其の人は餘程信仰のある人と見える。

であるから、佛法を一つ本當に信ずると云ふことは、我が身の上から申しても、極くこれは必要なことである、死んでから後の話ぢやない、死んでから後の話ではあるが、其の話が即ち現在の用に立つのである。

當地方は大變佛法が盛んであるさうである、乍併夫れは、是れまで盛んであつたと云ふ習慣だけでは本當に有難いとは言へぬ、廣島縣なども中々盛んであるけれども、本當に有難いと云ふ人は矢張り尠ない、コツチも或はそんなことではあるまいかと思はれ

る、夫れであつて見ると實に残念なことである、でどうぞ、信ずる以上は本當に信ずる、如來様の御恩徳を、本當に自身の身に浸んで有難いと云ふことにならんければ所詮のな
いことであらうと思ふのであります。

第二 總論

日本佛教と云ふやうなことは、是れまで餘り申さぬことである、日本佛教と申すと、
印度の佛教、支那の佛教、日本の佛教と云ふやうに、さう佛教が色々あるものかと、申
すやうであります、佛教と言へば御承知の如く、お釋迦様のお説きなされた教へであ
りますから、印度の支那の日本のと云ふ異りのある譯はない、併しお釋迦様のお説きな
された一つの佛教ではありますけれども、佛教は、外の宗教とは違つて、非常に方面
の多いもので、即ちお釋迦様の教へは極く深い廣い教へであるのです、耶穌教のやうな
單純なものではない、夫れで一つの佛教と申しても、色々な方面がある、一寸と申しま
すれば、マア哲學のやうな方面、世間で言ふ純正哲學のやうなもの、これは佛教の中に

は、最も澤山其の方面があるのです、夫れから倫理と云ふ方面もある、夫れから今日の學問で言ふ心理學と云ふ方面もある、佛教の哲學は唯心論と申しても宜い位なものでございませぬ、心理と云ふ方面の側は、佛教にも餘程詳しく説かれてある、併し世間の方の心理學と申すものは、横に細かく廣く研究される、我々の此の日々の、物事に接して起る此の心の働きを廣く微細に研究されるのである、けれども、縦に奥深くと云ふ側は、今日の心理學の方では、極く發達をして居りませぬ。

マア近頃のやうに催眠術と云ふものが發達した上からして申すと、お互ひの心と云ふものは、どうも此の一尺か一尺五寸位の、此の頭の中のみ働いて居るとはどうしても思はれません、餘程横に區域が廣く働くもの、如くしか思へない、御承知でもありませんが、催眠術に掛ると、此處に坐つて居りながら、長崎の事でも知りやア、北海道の事

でも分る、斯う云ふことが事實にあるのです、マア實驗をなされたお方であつたなれば、こんなことは珍らしい事でも何でもありませんが、さう云ふ事を爲されぬお方は、怪しいと思ふ方もありませんが、實際に分るんです。

私の學校に、催眠術を施すことの至つて上手な人がある、これは學問の方は深いことではありませんが催眠術を施す方面は餘程上手である、夫れで學校の同窓會などには其の人に來て貰つて、慰み半分に實驗を見せて貰ふ事は時々學校である事でありませぬが、先年も學校の同窓會を或處で開いた、其の時に其の人が來て實驗をして見せて呉れられた、十五六になる子供でありましたが、夫れに催眠術を掛けた、さうして、今學校には誰れが居るか、を尋ねた、すると、今は髯の生えた袴を穿いた者が居る、と言ふ、夫りやア學校の小使であるのである、夫れでは實際さうであらうかどうかであら

うかと、直ぐに電話を學校へ掛けて聞いて見た處が、果して夫れが居る、留守番をしてチャント構へて居る、會場と私の學校との間は殆ど一里もありませう、一里ばかり隔つて居る處であるけれども、今申すやうな具合で、今誰れがどうして居る斯うして居ると云ふことが直き分る。

夫れは東京市で一里ばかり隔つた處であるけれども、北海道の話聞いても長崎の話聞いても同じ譯である、東京に居る人で、仙臺に親戚のある人があつた、其の人が催眠術に掛つた者に向つて、今親戚の家はどうして居るか尋ねた、すると、今婆さんが火鉢の傍に坐つて居る、さうして子供が三人來て遊んで居ると言ふ、夫れは不思議な事だ、婆さんも居られる、子供も居るが、乍併子供は二人しかない、三人と云ふのは合點が行かぬと云ふので、直ぐに書面を認めて、イツの幾日の何時頃に、

家の子供はどうして居つたかと言つて遣つた處が、其の時には鄰りの子供が一人遊びに來て、家の子供二人と遊んで居つた、婆さんもチャント居つたと云ふ返事が來た、キチツと言つた事が合つた。

そんな事は珍らしい事ではあるまい、皆襟風に御承知の事であらうけれども、右に云ふ處から考へて見ると云ふと、我々の心と云ふものは、こんな小さな頭の中だけで働いて居ると云ふことは、どうしてもさう信ぜられぬ、餘程横に空間的に廣く働くものであると云ふことが考へられなければならない、どうしてさう廣く心が働くものであらうかと、云ふことになる、お互ひが日夜使つて居る此の心が、さう空間的に、三里も五里も五十里も、百里も向ふまでも働いて居ると云ふことは、チヨト考へ付くことは出來ない、夫れで學問の上から研究して來ると、どうしても此の、我々が毎日使つて居る心

の外に、モツと區域廣く働く所の心と云ふものがなければならぬと、云ふことになつて来る、けれどもさう云ふやうな事は、今の心理學ではまだ確かな研究は出来て居らない、唯だ催眠術で實際の上事實の上に現はれた處から判断して、我々の心の底には、モツと大きな廣い心があると云ふことを、言ひ出したまでのものなんです。

そんな具合で、世間の心理學と云ふものは、空間的には、極く微細に分析をして研究してありますけれども、奥深く研究すると云ふことは、今日の心理學の上では發達して居らない。印度の方の心理學は、横に我々の心の働きを研究する上で申すと云ふと、餘り細かい詳しい研究はない、分析的に極く微細に我々の心の働きを説くと云ふ方の側は尠い、今日の世間の心理學に比較すると、餘程粗末と言はんければならぬ、其の代り

奥の方の事になつて来ると、非常に詳しい、我々の心と云ふものは、毎日使つて居る此の心の奥に、まだどう云ふ心がある、其の外にどう云ふ心がある、と云ふやうな具合に、我々の心を縦に奥深く研究すると云ふ風に、印度の心理學の方は餘程詳しくなつて居る、兎に角佛教の上では、心理學と云ふ方面は随分詳しく深く説かれてある、夫れから物理學と云ふ側の方面も佛教の中にある、その他今日言ふ文學と云ふ方の事も、佛教の上では非常に發達して居る、文學と云ふものは佛教の大乗の方面の上では非常に立派なものになつて居るのである、夫れから餘り多い事はありませんけれども、偶に出てあるのであるけれども、お醫者様の話も出てある、藥の藥劑の話も出てある、種々様々の事が、佛教の中に説かれてある、そんなやうな具合で、佛教と一口に申すけれども、其の佛教の中に含まれてある材料と云ふものは、種々様々な材料があるのである、種々様々な

方面に佛教と云ふものが現はれて居る、さう云ふ其の多方面なものでありますから、そこで弘まる處の土地によつて、其の土地に適應する方面が段々發達して來る、早く言ふと、哲學の大變盛んな所では、佛教の哲學の方面が發達する、又忠孝とか言ふやうな道德の發達して居る國へ行くと、佛教の中の其の方面が段々發達して行く、文學の大變盛んな處へ行くと、文學の方面が非常に發達する、斯う云ふやうな具合で、弘まつた所の土地の人情風俗に適應した方面が發達して來る、其の發達をした上から見ると云ふと、印度に弘まつた佛教と、支那に弘まつた佛教と、日本に弘まつた佛教とは、幾らか違ふ、發達した方面が違ふ、無論その中に一貫して居る物はある、即ち印度の佛教も支那の佛教も、日本の佛教も、佛教の本體と云ふものは少しも違ふ處はない、マア早く申すと、迷ひを離れて悟りに入らう、斯う云ふ方の側になると、印度の佛教でも夫れを

説くより外はないのである、支那の佛教でも夫れを説くより外はない、日本も無論夫れを説くのである、此の轉迷開悟と云ふ側が即ち佛教の本體と云ふ處である、其の佛教の本體と言はれる處の意味合と云ふものは、印度の佛教の上でも、支那の佛教の上でも、日本の佛教の上でも、皆これは發達をして居るのでありますけれども、その發達の仕振が違ふ、其の土地々々の人情風俗に適合した處に於て發達して居る、例へば、同じ轉迷開悟と云ふ方面でも、其の轉迷開悟の入り方が違ふ、同じ悟りに入りたいた言つても其の悟りに入ると云ふ側に於て、印度は印度の人情に合つた法門から悟りに入ると云ふ様に發達をする、支那は支那の人情に於て悟りに入れるやうに、段々門が開けてある、日本は日本の人情風俗に合つた方の側からして悟りに入ると云ふ方法が段々發達する、斯う云ふことになる譯である、其の發達の違ふ處から申すと云ふと、印度の佛教、支那の

佛教、日本の佛教と、斯う申しても決して差支へない譯である、今日日本佛教と、云ふのは、即ち其の方の側からして云ふことなन्दす。

夫れで先づ哲學の方から申すと云ふと、チト六ヶしい言葉が出来るが、今日の世間の哲學で言ふ現象論と云ふ側が、印度の方で發達をして居る、夫れで宗教的に實行すると云ふことになる、どうしても厭世的になる、夫れは現象論の結果としてどうしてもさうならんければならぬ、夫れで印度の佛教を實行と云ふ方面から眺めると云ふと、どうしても厭世と云ふことになる、厭世と云ふものは大變詰らぬやうに申すが、マア詰つても詰らないでも、兎に角印度の佛教は厭世と云ふものになるのは間違ひない、厭世法であるけれども、其の厭世なるものは、世間で申すのとは振合が違ふ、今日世間で厭世と云ふことを申すのは、モウ此の娑婆は厭である、世界は厭である、イツその事死んで

了うたが宜いと、斯う云ふやうな考へになるのを厭世と言ふが、けれども印度の方で發達した厭世的の佛教と云ふものは、さう云ふものとは振合ひが違ふ、此の世界は一向望みのない世界である、生きて居る所詮がない處である、イツソの事死んだ方がましだと云ふ氣になり、今日自身の商賣するのも仕事をするのも等閑になる、自身の身を修めるとか、行ひを良くするとか言ふやうなことには一向頓著せず、唯だ早く死んで了へば宜いと、斯う云ふやうな振合の厭世とは大變振合が違ふ、これはマア追々とお話を申せば分かることであるが、一ト口に申せば、印度の厭世と申すのは、成程此の世界を、價値のない、値打のない、執著すべきものではない、斯う見限りはします、見限りはしますけれども、乍併、値打のない世界であるから、如何なる事をしても差支ないと云ふのではない、値打のない、便りにならない、頼みにもならない、一向生きて居つて

も所詮のないと云ふ程の世界である、斯う云ふ世界をどうぞ遁れたいものである、こんな世界で色々煩悶をするやうなことの無いやうになりたい、即ちこんな價値のない、頼みにならない、當てにならない世界に永らく生きて居つて、種々な煩悶をするやうな、斯う云ふ苦を免れたいものである、併し其の免れると云ふはどうするか、自殺をすれば事が済むか、死んで了うたら夫れで事が済むか、と云ふと、決してさうは行かない、幾ら自殺をして見た處が、幾ら死んで見た處が、又茲へ生れて來るから、自身の業力のある以上は駄目である、死んでも矢張り此の苦を受けて此處へ出なければならぬ、そこで、こんな頼りにならない、力にならない、當てにならない世界で、永らくの間煩悶するのは厭である、斯う云ふ苦は遁れるやうにしようと云ふには、斯う云ふ處へ出て來ないやうに、一つ自身が修行をせんければならぬ、斯う云ふ詰らない世界に生れて來ないやう

に、自身が修行をして行かぬことには、此の世界に生れて來ないと云ふことは出來ない、其の修行のない以上は、幾ら死んで見た處が、幾ら自殺をした處が、矢つ張り出て來なければならぬ、然らば斯う云ふ處へ出て來んやうにするにはどうすれば宜いか、斯う言ふと、ソコに即ち八正道と云ふ、八ツの正しい道がある、お互ひが斯う云ふ詰らぬ世界へ出て、永らくの間煩悶せんければならないと言ふのは、前生に於て八正道が修してなかつた、即ち自身が良からぬ心を持ち、良からぬ行をした、其の結果として斯う云ふ何んにも力にならない處へ出て來て、永らくの間苦しまんければならぬのである、若し此の八正道を修して、正しい心を持ち、正しい行ひをして、正しい考へを持ち、正しい生活をする、即ち良い道を履んでさへ行けば、斯う云ふ悪い世界へ出て來んで済むこととなる、斯う云ふ處から正しい道を修せんければならぬと云ふのが、即ち印度の厭世

である、夫れぢやから今日の厭世とは大變振合ひが違ふ。

支那になると云ふと、又印度とは大分違ふ、支那は哲學の方の側から申すと云ふと、本體論と云ふ方面である、佛敎を學んだお方であると御承知でありますが、小乗敎大乘敎、小乗敎と云ふのは哲學の方の側で言ふと現象論、そこで實行の側はどうしても厭世的になる、印度は小乗敎が發達した、夫れから支那になると云ふと、支那人は印度人とは大分振合ひが違ふ、支那では、哲學で言ふ本體論、佛敎の言葉で言へば大乘敎といふ方面の敎へが發達した、而も其の哲學的の理論、大乘の敎理が非常に立派に發達した、其の敎理や理論は立派に發達をして來たけれども、其の實行と云ふ側になると、まだ支那では格別に發達をしない、夫れが即ち日本へ來て發達した、日本では、其の支那で研究せられ支那で發達した大乘の、極く奥深い、極く廣い、其の理論を、直様今日の事實

の上には現はすことの出来るやうに發達せしめた、夫れが即ち日本の佛敎、夫れで佛敎として日本の佛敎は一番結構な佛敎なんです。

そんなことを言うたら、其の土地々々で出來たものである、お釋迦様のお説きなされたものではないではないかと、斯う云ふ方もあらうけれども、さうでない、どれもこれもお釋迦様のお説きなされたのであるけれども、前申す如く、餘程手廣くお説きになつて居る、小乗敎と云ふ側もお説きになつてあれば、大乘敎と云ふ側もお説きになつてある、其の大乘の敎理は、直様今日現實の上の間に合ふやうに、實行の上からもお説きなされてある、御説法の上には夫れが皆んな具つて居る、けれども其の土地の人情が、印度のやうに厭世的の人情であると云ふと、其のお釋迦様のお説きなされた厭世の方の側だけが早く眼に著く、これは自然さうなる、佛敎に限つた譯ではない、總ての物がさうなる、

自分の好きなものは直ぐに眼が著く、夫れと同様で、お釋迦様の佛敎を見た處で、印度人に於ては、厭世的の側が、どうしても頭へ能く這入る、夫れを自身が必要を感じる、其の方を取り出して弘めたから、其の方が大變に發達をした、ところが支那人になると云ふと、厭世的の思想は尠い、極く微細に、極く奥深く、深遠なる哲學の道理を考へると云ふ性質がある、哲學研究の性質が支那人にある、さう云ふ性質の人間であるからして、其の方の側が早く眼に著く、ヤア佛敎にはこんな事がある、お釋迦様がこんな事を言うて置かしやつた、そこで其を自身の上で段々と砕いて、細かく説いて、夫れを弘めようとしたから、其の方の方面が大變發達した、日本人は又支那人とは違ふ、一體日本人は餘り六ヶ敷い理窟を考へると云ふことには長じて居らぬ、其の證據には哲學者と云ふものは一向ない、よう考へて御覽なさい、昔から今日に至るまで、日本に哲學者はあ

りません、印度や支那の請賣りをして居る學者ばかりである、日本で特に發達した哲學と云ふものは恐らくないと言つても宜い、其の代り日本人と云ふものは、何んでも直ぐに自身の中に合ふやうに使ふ、これは佛敎に限らない、どんな物でもコチラへ這入つて來た物は、今日の自身の生活の上合ふやうに使ふと云ふのが、日本人の特性、大和民族の特長なのである、えらい處である、自身の今日役に立たぬ事は一向相手に仕ない、直ぐに自身の中に合ふ事であれば遣らぬ、マア學問の事のみならず宗教の事のみならず、西洋から這入つて來たものを考へて御覽なさい、どんなものでも西洋にある儘を日本人が使うては居らぬ、皆んな自身の中に合ふやうにして使うて居る、西洋料理と云ふけれども、日本で食ふのは本當の西洋料理ではない、佛蘭西や英吉利あたりで食べる西洋料理と、日本の西洋料理とは大變違ふさうである、なぜ違ふかと云ふと、佛蘭西の料理

も英吉利の料理も、夫れを日本人の口に合ふやうに拵へ直す、そこで西洋料理が日本で發達した、支那料理でもさうである、香港で支那料理を食べたり、上海で支那料理を食べるのと、日本で食べる支那料理とは、餘程風が違ふ、日本へ這入ると、日本人の口に合ふやうに拵へ直す、總て餘所の國にある物を其のまゝ持つて來て使ふと云ふことはしない、夫れでは役に立たない、直ぐに自身の用に立つやうに拵へ直して使ふ、夫れが日本人の特長である、料理のみならず、總ての事が皆んなさうである、學問でもさうぢや孔子や孟子の學問が日本に傳はつて、日本で儒教が盛んになつたと言ふけれども、日本に弘まつた儒教と云ふものと、支那に弘まつた儒教と云ふものとは大變風が違ふ、支那に弘まつて居る儘の儒教と云ふものは、矢張り我が國體に合はぬ事があるかも知れぬ、けれども日本人に扱はれると云ふと、此の國體を擁護する處のものになつて了うて居る、

夫れで御維新などの出來上つたのは、神道の學問をした人、儒教の學問をした人の手によつて成つたと言ふけれども、神道の學問をしたと云うても、其の元を尋ねて見ると儒教である、孔子や孟子の學問を研究して、其の孔子や孟子の學問の中に、日本の國體に能く適合する、日本の忠孝道德と云ふものに能く合ふ部分がある、其の部分だけを取出して、そこで直ぐに日本の國民道德の間に合ふやうに扱つて來る、即ち水戸の神道の起つて來る所である、其の水戸の神道などの學問から又御維新など、云ふことが、段々出來上つて來たものである、總てが皆日本人の人間といふものは、今申すやうな具合に、直ぐに今日の生活の上に間に合ふものに仕直して、餘所の國のものを使ふものである、これが大和民族の特長である、えらい所である、えらい處でもあるが、或は又極く短所かも知れぬ、其の短所と云ふ側から言ふと、どんなものでも、現金的に、直ぐ間に合はな

いものは入れぬと云ふことが、一番今日の日本人の短所である、亞米利加の物でも、英吉利の物でも、這入つて来た物を直ぐ間に合はせると云ふことは、大變結構である、けれども直ぐ間に合はない物はいれない、用立てない、斯う云ふやうな考へを持つて行く、夫れが日本人の短所である、宗教の事に就て私は平生感ずるのであります、此邊の宗教状態はどんな風になつて居るか知りませぬが、外の土地、或は東京神戸大阪、あの邊の人情で見ますると云ふと、極樂行きの話をした處がソイツは役に立たないと云ふ有様、昔の人間は夫れ有難かつたかも知れぬけれども、今日の都會へ出て居る若い者は、死んだ先きの話を聞いた處が仕やうがない、極樂行きも結構であるけれども、夫れよりも今日の生活に對して間に合ふ話が聞きたい、今日の日々の仕事の上の間に合はぬものを聞いた處が仕やうがない、と云ふので、昔流の極樂行きの話は一向使はぬやうになつ

た、これは強ち日本ばかりではありませんまいけれども、日本が最も甚だしい、耶蘇教の側でもさうである、一體耶蘇教の教へはどんなものであるかと云ふと、クリストの教へによつて、死んだ後には天國へうまれさせて貰ふと、云ふのが耶蘇教の本當の所なんであらうと思ふ、死んだら天國へうまれさせて貰ふ、矢張り未來の方の側に耶蘇教の信仰と云ふものはあるのです、然るに、未來の話をして居つては、今申すやうな具合に、現在の役に立たない、死んだ後の話はどうでも宜い、生きて行く話をして呉れへと、斯う云ふ人情になつて居る、そこで耶蘇教の方では近頃追々話の方針を變へて、天國行きの話は止めて了うて、現在の上で神さんの助けを受けるとか、現在の上に神さんを役立てやうとするやうになつた、耶蘇教を信ずれば、酒飲みが酒嫌ひになるとか、不品行のものが行ひが改まるとか、現在の上に直ぐ間に合ふやうな説き方をするやうになつた、

そこで、耶蘇教と云ふものは結構なものであると云ふことになつた、佛教の方でも近頃、餘程さう云ふことに變へて來た、眞宗で申せば、未來は阿彌陀様のお慈悲によつて極樂へ往生をさせて頂くと云ふのが、親鸞聖人の御信仰で、蓮如上人のお教へも夫れである、從來の説法は夫れであつたけれども、今日の若い者は夫れでは承知をしない「極樂行き、夫れは結構である、けれども我々は、夫れよりも、今日の商賣をするのが大事である、今日生きて行く上に於て何か便りになるものが得たい」と、斯う云ふ人情になつて來たから、單に極樂行きの話ばかりではない、耶蘇教のやうに、家長を大事にし、夫婦仲よく、兄弟仲よくして、悪い事を考へず、歪んだ行ひをしないやうにと、現在の上を説く者が多くなつて來た、現在の上を就て説きさへすれば、人は喜ぶ、けれども夫れは極く短所である、宗教の上から言ふと、宗教本來の面目から言ふと、さう云ふ考へと云ふも

のは、本當の宗教の味の分らぬものである、極く夫れは近眼な話である、現金的な話である、さう云ふ現金的な話でなければ承知が出來ないと云ふことになつて來たが、これは日本人の短所であらうと思ふ、宗教と云ふものはそんなものではない、今日商賣をする上に力になるとか、或は家庭が圓滿に治るやうにするとか、兄弟仲よくするやうにするとか、悪い事を仕ないやうにするとか云ふやうな事は、世の倫理道德の話である、宗教でなくとも、倫理道德で夫れ行くのである、教育勸語を載いて、十分にあの御精神が會得が出來たなれば、家庭の圓滿と云ふことも、親子の間も、兄弟の間も、夫婦の間も、仲よくして行くことが出来る、必ずしも宗教の力を藉りるには及ばぬ、佛教のみならず總ての宗教と云ふものは、そんな所にあるものではない、宗教はモウ一つ奥深いものである、早く申すと、お互ひのトントの落付きはドコぢやらうと、斯う云ふ相談が宗教の

本旨である、金も儲けた名譽も出来た、さて乍併、モウ六十ぢや、間もなく死なんければならないが、さてどうしたものであらうかと、斯う云ふ時の話である、けれども死ぬと云ふことは、六十以上になつて死ぬと云ふことに限つたものではない、死ぬと云ふことは、誰れにでもある筈で、若い者でも其の覺悟がなければならぬ、今日現在に結構であるけれども、さて何時死ぬやらも分らぬが、其の亡くなつた時には自分はどうなるであらうか、ドコへ落付くか、ドコへ行くであらうか、ドツチ向いて行つてどうするのか、ソコの話になると道徳では分らぬ、倫理でも分らぬ、教育勅語を幾ら戴いて見ても其の處は分らぬ、ソコが本當に分らねば、心底に本當の落付きと云ふものは、出来るものではない、本當の落付きが出来ぬのみならず、諦めると云ふことが出来ない、心底からして、今日自身が不幸な目に遭ひ、禍ひに出遭つた時に、夫れを潔く諦めて、さり

して未來に向つて、自身は斯斯くの身の上にして貰ふのであると云ふ落付きが出来て、ソコに本當の力を得ると云ふのは、即ち宗教の信仰である、ぢやから一寸聞くと、極樂行きの話は今日の間には合はぬぢやないかと云ふやうなものであるが、よく考へて見ると現實の上に於て落付きを得ると云ふことは、未來の上に落付きがなければ出来はしない、どうしても根本の處に於て眞の腹が据つた上でないと、現在の上の事々物々の上に於て、眞の落付きを拵へて行くと云ふことは出来ない、未來の話は死んだ先の話のやうであるけれども、さうぢやあない、未來の話が即ち現在の上の間に合ふ、イツも私が申す如く、宗教の信仰は太陽の反射のやうなものである、太陽の光と云ふものは、西に日が傾いた時になると、西からして東の白壁にボーッと照り付ける、さうすると今度は其の壁の反射によつて、西の方が眞赤に焦れる、宗教の信仰は夫れなんで、我々の未來の事に

就て明りを拵へると云ふと、其の未來を照す所の明りが、現在の上に反射する、そこで未來の上に照す明りがあると、同時に現在の上をも明るく照らす、極樂行きの埒が明くなれば、夫れと同時に現在の上にも埒が明いて来る、夫れでなければ現在の落付と云ふものは出来るものではない、未來の力を持つて来んければ、現在を自由に扱ふことは出来ない、現在より以上の力を持つて来れば、現在を自由に扱ふことが出来る、此の疊の上に居つて、如何やうにして上げようとしても、上るものではない、自分の身を他に移して来なければ疊を上げることが出来ない、夫れと同様に、現在の上に腰を据ゑて居つて現在を自由に扱ふと云ふことは出来ない、現在を自由に扱ふには、心を現在以上の位置に移した所で初めて現在を自由に扱ふことが出来る、其の心を現在以上に吊り上げるのは、夫れが即ち宗教なんである、此のうるさい、少しも値打ちのない、此の現在世界

より以上に自身の心を吊り上げて、そこで初めて値打ちのない者に値打ちを作ることが出来る、便りにならぬ者に便りを拵へることが出来る、夫れぢやから此の宗教と云ふものは、極く大切なものであつて、其の宗教は矢張り未來の信仰がなければ用を爲さない、現在の信仰ばかりでは用を爲すものではない、眞宗の信仰と申すならば、我々は死んだら一體どうなるものであるか、と云ふと、今度は佛のお慈悲によつて淨土へ往生する、極樂へ往生させて頂くのである、如此く未來へ向ふ信仰が極樂へピツシヤリとぶツ付かる、其の極樂の光りが現在の上に反射して来る、何事をするにも、こんな者が淨土詣り、こんな詰らぬ小さな事に損ぢや得ぢやと云ふやうな、こんな淺間しい者が、佛のお慈悲によつて佛にして頂くのであると、斯う云ふ光りが出て来るやうになれば、さう無暗に慾深くは出来ぬ、さう人を瞞して、自分さへ宜ければ宜いと云ふやうな感情は起りやう

はないやうになる、夫れで未來の信仰があれば、其の信仰の光りが現在を照すものである、信仰によつて現在を美しく世渡りをして行くことが出来る譯である、夫れが即ち宗教、通例の倫理道德と違ふのはソコなんです、通例の倫理道德は反射の力と云ふものがない、宗教の上の倫理道德は、信仰の光の反射によつて實行すると云ふことになつて來る、ソコが、單に教育の上で教へる倫理道德と、佛教の上で教へる倫理道德との違ひ目である、其の味ひを能く吟味せんければならないのである。

けれども今日の日本の人間は、そんな事を考へる暇がない、直ぐに間に合はなければならぬ、そこで本當の信仰と云ふものは、今日の青年の上には分らない、餘程近頃宗教に傾いた話を好んで聞くやうになりましたけれども、其の宗教的の心と云ふものはどんなものかと云ふと、唯だ現在の上に便りを得よう、現在の仕事を樂に仕ようと云ふに過

ぎぬ、自身の根本問題に逢うて起つた心ではない、そこで今日の宗教は、表面は盛んになつて居るやうであるけれども、以前と同じ事で、本當の信仰と云ふものはありはしない、併しまア聞くやうになつたのは餘程結構である、多くさう云ふ所からして本當の根本問題に這入るやうになるのである、さう云ふ風に導いて行くなれば極く結構なことであると思ふのである、要するに長所が短所である、けれどもどんな物でも現在の間に合ふやうにすると云ふのは甚だ結構である、そこで佛法を弘めるに就ても、支那人の弘め方と日本人の弘め方とは違ふ、随つて弘まつて居る佛教も、支那や、印度に行はれて居るものとは餘程振合が異つて居る、餘程結構なものになつて居る、實際の用に立つ物になつて居る、夫れが即ち日本の佛教。

第三 印度の佛教

前に申したことは荒方の話に過ぎないのであるが、更に前に戻つて、印度ではなぜさう云ふ小乗教が発達するやうになつたか、どうして其の厭世的の宗教が盛んになるやうになつたかと申すと、印度でも無論、一方には大乘の教へも弘まつて居つた、けれども大多数の上から言ふと、前に申すが如く、印度の佛教は概して厭世的である、即ち小乗教の側が盛んであつて、大乘教は殆ど無いと言つても宜い、今日の印度では、佛教は宛るでないと言つても宜い、錫蘭島の方の側に少しく残つて居る、夫れからニポールと云ふところにも少しく残つて居るさうである、彼の佛陀伽耶邊に引りて居るものは、印度教と云ふもので、佛教から言ふと外道である、其外道の人間に佛跡は總て支配されて居

る、夫れで佛教者が行つて、佛陀伽耶のお釋迦様のお姿を拜まうとする時には、其の方の側へ挨拶をして、夫れから拜まんければならないと云ふやうな、實に残念至極な事になつて居るさうである、僅か錫蘭島の方に佛教が行はれて居るけれども、其の佛教はど

う云ふ佛教であるかと云ふと、小乗教、厭世佛教の教へである、印度と云ふ國は、氣候の上から申しても、非常に暑い所で、天然の上より壓迫を受けて居る、又人事の上から申しても、即ち政治の上から申しても、是又大いに壓迫を受けて居て、實に苦しくて叶はぬ、そこで此の厭世と云ふ思想が印度人の頭の上に湧いて來る、佛教を聞いて見る、佛教を聽聞して見ると、小乗教と云ふ側の教へが、厭世的の印度人の考へと同じやうな振合のものであるからして、小乗教が非常に氣に入るやうになつて來たのである、其の小乗教と云ふ側で説く佛法はどう云ふものであるかと云ふと、哲學の言葉で言ふと

現象論と言ふのであつて、此の宇宙萬有を、現在に現はれて居る現象の上に就て説明して行くのである、佛教で宇宙萬有の道理を説明し、夫れを研究すると云ふのは、何から一體起つて來るぞと云ふと、普通の哲學とは大變其邊の趣きが違ふのである、普通の哲學では、宇宙萬有其の儘を研究して行く、山は山のなり、川は川のなりで、其の物を研究して行くのである、ところが佛教で宇宙萬有を研究すると云ふのは、自身を研究するのである、お互ひも此の宇宙間に生れて居る以上は、矢張り萬有の一なんです、そこで自身を研究するには、先づ他の萬有から研究するのである、さて自分は宇宙の間に生じて居る處の一物であるが、一體自分は如何なるものか、人間と云ふものは如何なるものか、どう云ふ所から出來てどうなつて了ふものであるか、夫れは一つ自分より外の者を考へて見ねば分らない、自分の身體だけでは分らない、一體山と云ふものは何から出

來てどうなつて了ふものであるか、川と云ふものは何から出來てどうなつて了ふか、斯う云ふやうに、宇宙萬有を研究し初める、宇宙萬有を研究すれば隨て自身の眞相は分る、天地の間に現はれて居る物の眞相を能く推し究めて見ると云ふと、遂には無常と云ふことに歸著するのである、イツまでも少しも變化なく續いて居ると云ふものは少しもない、宇宙間ドコからドコまで尋ねて見ても、ドコからドコまで搜して見ても、何萬年も何億年もヂツとして居ると云ふものは一つもない、皆んな時々刻々に變化して行く、樹一つ見ても、春に芽が出る、夏になると大變葉が成長する、秋になると紅葉して、冬にはスツカリ落ちて了ふ、又春に芽が出て、夏に葉が成長する、何遍でも繰返して居る、これは常に樹のみならず、一切總ての物が其の通りで、日々夜々に變化する、夫れのみならず、時計の Cochuk と言ふ度に變化して行くのである、石の如き物は何萬年でもあ

の通りヂツとして居るであらうかと云ふと、決してさうではない、あれも學問の上から段々研究して見ると、時々刻々に變化するさうである、宇宙間ドコからドコまで尋ねても、ヂツとして居るものは一ツもない、一時間も一秒間もヂツとして居るものはない、一秒間より尙ほ僅かの時間を、佛教で言ふと刹那と云ふ、其の刹那に變化して行く、昨日髻を剃つたかと思ふと、モウ今朝になつて手に觸るやうになつて来る、それだけ變化して居る、そんなやうな具合で、我々の身體も皆、刹那に生じ刹那に變化して行かぬものは一つもない、で此の世界の如きも其の通りで、出来たかと思ふと滅し、滅したかと思ふと出来る、皆んな時々刻々に變化して居るのである、變化しつゝあるものとするといふと、今日良いと言つて夫れがイツまでも續くものではない、今日のやうに自身の都合が宜くても、夫れがイツまでも續いて行くものではない、で此の文明の如きも其の

通りで、一寸我々が考へると、此の文明は段々發達して、ドコまで發達するか知れないが、其の發達し切つた所を見て死にたいと思ふやうなものであるが、さて此の文明がどれ程續くものであるかと云ふと、今の事は分らないけれども、昔の事に徴して考へると、此の文明も長く續くものではあるまい、僅か四千年ほど前にあつたバビロンなどと云ふ文明國は、今日ドコに其の姿があるか、ドコに其の模様が残つて居るか、何んにも残つて居らぬ、そんなら其の文明は、極く詰らぬものであつたかと云ふと、先達て亞米利加から來た史學の博士の話をせられたのを聞くに、どうもあの時の文明と言ふものは非常に發達したものであらう、中々今日の文明以上のものであらう、矢張鐵道もあつたやうな形跡が認められる、電信もあつたやうな形跡が認められると云ふ様なことを申されたさうである、ドコソコで埋められてあつた處の市街を掘り出した、其處に大きな石門

がある、其の石門に文字が彫つてある、其の文字を読んで見ると、恰度今日の選舉の廣告のやうに、誰れを選舉しやうと云ふやうな廣告である、さうすると今日の立憲政體と云ふやうなものも、其の時代にあつたかとも認められると云ふ話をした人もある、中々大昔の文明は非常なものであつたらしい、あつたらしいけれども、今日は煙消霧散、霧の如くに散り煙の如くに消えて、何んの跡方一つもないやうになつて居る、情けないものである、其の間には電氣も發明したであらうし、鐵道も發明したであらう、蒸氣も發明したやうにも思はれる、其の位であるから、學問も盛んであつた、随つて非常に評判の高い有名な學者も居つたに違ひない、さう云ふ學者が居つたならば、其の學者の著述した立派な書物も出來て居つたに違ひない、随つて商工業も非常に發達をして、非常な大金持があつたに違ひない、又大變な大勳位を持つて居るやうな偉い人も居つたに違

ひない、然るに四千年後の今日になると、誰れが學術の發明者であつたやら、誰れが金持であつたやら、誰れが大勳位であつたやら、影も形も何んにもないのである、すると實に此の人世と云ふものは詰らぬものである、お互が金儲をして見やう、出世をしやう、或は眞理を發明しやう、大きな著述をしやうと、何んの彼のと八釜しく騒ぎ立て、居るけれども、夫れが都合よく成功して思ふやうに出來上つた所で、夫れがイツまで残つて居るものかと、斯う云ふことを考へると、實に情けないものである。

夫れは四千年前の昔の事であるからして、前に言ふ、現實的の日本人の頭には這入らぬかも知れぬ、けれども現實の上から言つても、今日まで大變榮耀に暮した人が、思はぬ事から全るで社會から、棄てられて了うたと云ふ人が随分ある、又、昨日までは非常な金持であつた人が、ホンの一ト月か二タ月に見る影もなく零落することがある、私の

知つて居る或處で有名な金持ちで、所得税の上では第一等と云ふ人で、私の法話などは
イツも聴きに來た人であるが、夫れ程大きな金持ちであつたけれども、僅か半年経つか
経たぬにスツカリ無くなつて、今日では其の人はドコに居るか分らぬと云ふやうな有様
である、さう云ふことを段々考へて御覽なさい、實に此の世界と云ふものは無常である、
無常であるばかりではない、實に情けない、ドコに一體値打がある、誠に詰らぬもので
ある、さう云ふ値打のない、さう云ふ便りにならない世界に生れて、さうして朝から晩
まで、消えて行くやうな仕事に汗膏を出して骨折つて、甚だしきは人を瞞したり、人を
殺したり、種々様々の事をする、實に愚の至りと云はんければならぬ、これ程愚なこと
はあるまいと思ふ、でソコに考へ及んで見る時になると、お互ひは斯うやつてヂツとし
て居る譯にはゆくまい、小乗教の上では、到頭終ひには、人世は愚なものぢや、情けな

いものである、無常であると、感ずるより外には何んにもありはしない、實に此の世界
は愚なものぢやと云ふことが、非常に感ぜられたならば、ヂツとして居る譯には可かな
い、何んとかして此の苦を遁れたいものであると思ふと、悠悠閑々として茶を飲んで居
る譯には行かぬ、ソコに氣が付いてお釋迦様……お釋迦様のみならず、随分今日でも感
ずる時がある、我々もさう云ふ事に感じた時には、非常に悲觀に陥る、けれどもお互が
さう云ふ悲觀に陥るのは、世界は詰らぬものである、價値のないものである、頼みにな
らないものであると、愚痴を起すが、何からさう云ふ愚痴を起すかと云ふと、今申すや
うな、哲學的に研究をして、其の頭から悲觀が起つたのではない、現在の境遇に支配さ
れてさう云ふ感じが起つたので、浮いた考へである、少し都合が好くなると、まるで其
の考へが無くなつて了ふ、面白うてく堪らぬやうになる、悲觀が忽ち樂觀となる、ナ

アニ金さへあればどんな事でも出来ると思ふやうな勢になるが、さて其の樂觀がイツまで續くかと云ふと、決してイツまでも續くものではない、少し都合が悪くなると云ふと、忽ち悲觀になる、さう云ふのは、世界の真相を本當に見破つての樂觀悲觀でなくして、お互ひの境遇から起つた浮いた考である、お釋迦様だけは浮いた考ではない、これが私はお釋迦様の一番偉い所であらうと思ふ、世界中あんなお方はあるまいと思ふ、キリストであらうがマホメットであらうが、其の外のお祖師方であらうが、皆境遇に支配されて起つた悲觀である、内輪の話であるけれども、親鸞聖人の如きも、内心へ這入つて見たらどうか知らぬけれども、

あすありと思ふ心のあだざくら

よはにあらしの吹かぬものかは

と古歌を詠んで得度なされたのは、表は矢ッ張り現在自身の境遇に支配されて無常觀を起し給うたのである、其の悲觀が我々より強かつたのであるから、到頭あれ程の發心が出て來て、あれ程の仕事が出来たのである、詰る所境遇に支配されたのである、けれどもお釋迦様は境遇に支配されたのではない、お釋迦様の境遇は、悲觀に陥るやうな境遇ではない、無常觀の起るやうな境遇ではない、人間として少しも悲觀の起るやうな境遇ではなかつたのである、お生れなされた時は誠に良い時で、學問の盛んな宗教の盛んな、大變知識の發達した眞最中にお出ましになつて、御誕生は花盛り、年中で一番時節の良い時にお生れなすつた、何から何まで揃うて、御自身の御軀も健全であらせられる、學問は十人並優れた才能をお持ち遊ばし、人に頭を下けることの要らないお方、さうしてお子供衆も御家内も誠に結構なお方、金に不自由もなければ道具に不自由もない、人

間として茲が不足ぢやと云ふやうもない立派な結構な境遇にお立なされたお方である、其のお方が一夜の間に其の境遇を投げ棄て、山の中へお這入りなされた、これが一番偉い所で、これは竝の人間の出来ることではない、此の一事だけでも、お釋迦様は當り前の人間ぢやないと私は思ふ、夫れは何から出来たかと云ふと、前申す如く、世界の真相を本當に見破つて、實に人世は愚なるものぢやと云ふことが頭のドン底に浸み込むやうになつたからして、どうしても今日の境遇に安んじて居ることが出来ない、此の境遇は無常である、イツ變ずるかも知らぬ、自身の體がドレ程健康でも、これは無常である、何時病氣に罹らんとも言へない、今日の境遇が宜いと言つて夫れに満足してヂツとして居る都合にはどうしても行かない、寧ろ此の境遇を擲つて、同じ事でも此の五十年を棒に振つて、更に今度出て来る五十年を善く仕やう、たとへ此五十年は投げ棄て、先

の五十年は、單に五十年だけではない、幾つ五十年が續くかも知らぬ、で寧ろ一遍の五十年は棒に振つても、永劫連續して居る五十年を宜いやうにしやうと思へば、ヂツとして居ることは出来ない譯である、そこでお釋迦様は山の中へお這入なされて、山の中で御修行が積んでお出ましになると云ふと、モウこれまでの境遇と云ふものは、實にモウ一文の値打のないものになつて了ふ、そこで著物はどうあらうが、食ひ物はどうあらうが、姿はどうあらうが、家はどうあらうが、そんな事には少しも頓著はない、宛るでモウ無一物、朝食べる御膳だけで、晝の用意もない、體にお著けになるのは、破れた布のやうなもの一枚あるだけで、著更へも何んにもない、實にサツパリした、物質から云うたら貧乏な、實に是れ程貧乏な、乞食のやうな、乞食でもない貧乏である、其の貧乏な境遇に立つて知らぬ顔をして、人を教導なされたのは、何から出来たかと云ふと、前に

申す如く、此の人世の値打のないと云ふことを見破つて、さうして値打があるか知らぬと云ふ心の再び起らぬ處まで御修行が積んだればこそ、物質上の著更へ一枚なくとも知らぬ顔をして居ることが出来るのである、斯やうな哲學の道理が、佛教の小乗教と云ふ現象論の上からして現はれて來ることになる、此の現象論の上からして、世界の無價値なものである、頼みにならないものである、と云ふことが分つたならば、此の世界に束縛せられぬやうに、此奴を一つ超脱しやうと云ふ念が起る、そんならどうすれば宜いかと云ふと、之れを超脱するには、斯う云ふうるさい世界、斯う云ふ値打のない世界に括られて苦しむと云ふのは、業因の然らしむる處であるから、さう云ふ種を蒔かないやうにすれば、即ち此の世界を超脱することが出来る、そんなら其の業因を受けぬやうにするにはどうすれば宜いかと云ふと、八正道と云うて、正しい心を持ち、正しい考へに住

し正しい言葉を言ひ、正しい行をして、正しい交をして、正しい仕事をして、正しい生活をする、此の八正道と云ふものを修して行けば、此のうるさい世界に束縛せられると云ふ業因を絶つことが出来る、今度此の世界の縁の切れた時に、モウ斯う云ふ世界の束縛は受けんでも宜いといふことになる、斯う云ふ譯になるからして、一生懸命に此の八正道を修すると云ふことになる、夫れが即ち小乗教の教へである。

で此の八正道を修すると云ふことが、段々と嚴密になつて來ると、どうしても精神を練り上げて來なければならぬ、此の物が欲しい憎い可愛いと云ふやうな心が始終起るやうなことでは、中々八正道と云ふものは修して行くことは出来ぬ、之を眞面目に修すると云ふことになる、このお互の心……騒ぐ處の心を鎮め返して來なければならぬ、即ち禪定に入ると云ふことである、精神を練り上げる、其の練り上げると云ふと、前申した

催眠術のやうな働きが起つて来る、斯うして居つては分らぬ事實が、鎮まつた處の精神の上に現れて来る、未來の事も過去の事も分るやうなことになる、そこで未來はないの過去はないの、我々は生れて来て死んで了へば、其の跡は烟のやうに消えて了ふと云ふやうな簡単な考へを持つて居るのは、夫れは誠に淺墓な考へである、自身が本當に精神を練り上げて考へた考へではない、本當に精神を練り上げて見たら、どんなものが現はれて来るか分らぬ、現在是れが事實になりかけて居る、福來君が研究せらるゝと、念寫が出来、千里眼即ち透視が出来ると云ふ、中には學者で、福來君の説を彼れ是れ批評する人がある、けれども自身が研究せずして人の研究を批評する資格はないと思ふ、隨分此の節は、矢張り精神上でも、餘程學問で研究の出来ない事實が現はれて来て居る、其の位の事でありますから、矢張り本當に鎮め返して來たら、どんなものが現はれて來

るかも知れぬ、随つて我々の眼に見えぬから、佛様は無いとか神様は無いとか云ふのは實に詰らぬ淺墓な考へであると思ふ、兎に角佛教の中に説いてあるのは、唯だ好い加減に言つたものではない、皆んな一つの實驗を経た上で書かれてあるもので、夫れを輕卒に批評し去つて了ふことは出来るものではない、で夫れを自身が實際試して見たいと云ふことなら、試して見られる法がありますから、遣るが宜い、夫れを遣らんでおいて輕に批評するのは、實に輕卒なことである、印度の人が言つて置いた事は、唯だ言つたのではない、唯だお經の通りであるかどうか分らぬけれども、兎に角今日でも、其の修行的仕やう、修練の仕方によつては、今日世間の人の現すより、ヨリ以上の事が出来るものであると私は思ふ。

第四 支那の佛教(上)

前述の如く、印度に於ては、小乗教が發達した、小乗教は哲學の方の側から申すと、現今の言葉で言へば、現象論、現象と申すは、此の宇宙間に種々様な物が現はれて居る、其の種々様な差別に現れて居る姿の上からして考へて説くが現象論である、此の差別的に現はれて居る姿の上から申す時には、どうしても無常と云ふことになる、無常と云ふことになりやア、自然にソコニ厭世的の考へが起きて來なければならぬのである、其の厭世的の考へが印度人の頭には始終あるのである、ソコへ持つて來て小乗教を聞いたり見たりすることになりやア、夫れが至極自身の心に適切に感ずることになるから、随つて其の方の側の教へが弘まることになる、盛んになることになつたのである。

ところで支那になると、支那では佛教の中の、大乘教と云ふ教へが盛んに發達することになつた、大乘教と申す教理は、哲學の方から申すと、現象論に對して言へば即ち本體論、即ち宇宙萬有と云ふものを本體の上から眺めることになる、差別に現はれて居る姿に就て説くばかりでなく、其の差別に現はれ、姿に現はれて居るもの、本性の上からして説いて來るのでありますからして、極めて幽玄なる、深遠なる、理想論と申すやうな風になる、さう云ふ深遠なる理想と云ふものは、是れ亦支那人の頭には誠によく適應するものである、支那人と申すと、今日は、チャン／＼とか言つて皆侮つて居りますけれども、乍併哲學理想と云ふものは、支那人は大變に長じて居るのである、支那人は中々哲學的の考へには富んだ人類であるのです、ズツと古い處で申しても、お釋迦様と同時代に老子と云ふやうな人が出て來て、哲學を述べた、夫れに次いで孔子と云ふや

うなお方が出て、儒教を説かれた、夫れから戦國時代になると云ふと、實に種々な哲學家が出て来た、莊子であるとか列子であるとか、孟子であるとか、荀子であるとか、中哲學者が澤山出て来て居る、實に戦國時代の學問界の有様と云ふものは、百花爛漫と云ふやうな風で、實に立派なものであつたのです、夫れから考へても支那人と云ふものは、中々理想に富んだ人民である、哲學的思想と云ふ側には餘程特色を持つて居る人類である、昔の書物で申すと、孔子よりズツと以前、支那の文化の盛んであつたのは夏殷周三代と申す時代、これが支那の文明のトンと盛大を極めた時ちやと申します、ところが近來、實際さう云ふものであつたかなかつたか分らぬ、支那人は理想に富んだものであるから、さう云ふ理想を述べたに過ぎぬ、實際あつたのでなからうと言ふ學者もありませんが、近頃さう云ふ方の側の研究が段々進んで矢張り書物に説いてある通り、夏

殷周三代は非常に文明の發達した時であつたと云ふことが分つた、夫れはどう云ふ所からさう云ふ研究が進んで来たかと云ふと、近頃支那でも色々な物を掘り出すことがある、これまでは、夏の時代であるとか殷の時代であるとか云ふやうな時と云ふものは、書物の上では非常に立派なことが説いてあるけれども、何んにも跡形が残つて居らぬ、其の時代に文字があつて、文章と云ふものが書かれたものであるやら否や、何んにも形跡がない、書經の上に堯典舜典と云ふものが載つて居るけれども、實際あの時分に、さう云ふ文章を書いて、立派な學問が行はれて居つたものであるや否や、書經にある堯典舜典と云ふものは、アトの人間が書いたものであらうと云ふ學者も随分あつたところが、殷の都をして居つた所から段々古い物が掘り出されるやうになつて、文字を書いた物が澤山アチラコチラから出る、その他銅器の如き古い物が澤山出て来る、其の出た来た物の

上に現はれて居る文字の上から研究すると云ふと、中々どうも文化の發達したものであると云ふところが大分分かりかけた、中々書き方から、其の釣合ひの宜い所から、夫れに現はれて居る文章の意味から、さう云ふ所を段々綜合して考へると云ふと、中々今日のやうなものではない、今日よりズツと以上の文明があつたものであらうと云ふことになつて來た、これは或は夫れがホンマであらうと思はれる、さう昔の人だとして嘘ばかりは言つて居らない、近頃の人は、少し自分の合點の行かぬことがあると、これは拵へたものであると、云ふやうに考へる人が多いのであるけれども、昔の人だつてさう無暗に無い事を作り出して書くと云ふことはない、即ちあの堯典舜典に述べてあることは、滿更無い事を述べたものでは無からうと思ふ、矢張り夏殷周三代と、昔から八釜しく言ふだけに、必ず立派な文明があつたものであらうと思はれる、支那の人民は哲學的思想に富んだ

人民であるのであるからして、上古の時代からして矢張り、物質的文明のみならず、精神上の文明即ち哲學的の理想も盛んに發達して居つたであらうと思はれる、即ち易と云ふやうなものは、その原始は伏羲氏の發明であると云傳へられてある、それは兎に角文王の拵へたものにした處が、孔子よりズツと以前の事で、夏殷周三代の即ち周の初めであるのです、中々以前から支那の人民は哲學的の考へに富んで居る人民である、哲學的の側になると、日本人よりもズツと發達して居る、晋の時代になつて、佛教が這入つて來て、佛教によつて支那人の哲學思想は一層深くなつたことでありますが、宋の時代になると、佛教と儒教と云ふものが調和せられて、これまでにない所の、御承知の如く、朱子學であるとか、陸氏の學の如きものであるとか、さう云ふやうな、哲學が段々現はれた、其の後になると陽明學と云ふ風な學問も現はれた、明時代になると、中々哲

學問の考へに富んだ人が出て居る、明時代の學者と云ふものは、大抵自分の頭から編み出した學問である、昔の人の言つた通りを守つて居る人と云ふものは極く尠い、こんな具合で、中々理想的の人民である、哲學的思想に富んだ所の人民である、さう云ふ人民であるからして、そこで佛教を見たところで、幽玄なる哲學的の側が非常に興味を感ずることである、ソコから段々奥深く考へて、極く微細に考へたところからして、天台宗と云ふやうな教理であるとか、華嚴宗と云ふやうな教理、立派な教理が現はれて來た、印度に於て未だ見なんだからして、全く天台大師や香象大師が拵へたものであるかと云ふやうなものであるけれども、さうぢやない、矢張り佛教の中に説かれてある、説かれてありはしますけれども、印度に於てはさう云ふ所へ一向氣が付かない、さう云ふ所へは眼が着かなんだ、支那の人民は今申す理想的の人民、早く言ふと哲學好きの人民で

あるからして、哲學の方の、極幽玄な、極高尚な所を見ると、夫れが先きに眼に著く、頭に這入るやうになる、そこで佛教の中に一口言つてあることを、夫れを百口にも言ひ直す、佛教の中にボンヤリ言つてあることを、極く明哲に言ひ現はすと云ふやうにして、天台宗の教理であるとか、或は華嚴宗の教理であるとか云ふやうな立派なものが出て來るやうになつたのである。

さう云ふ譯で、支那へ來ると云ふと、哲學的の教理が発達して、實に立派なものになつた、今日西洋人の哲學が立派であるとか發達をして居るとか言ふけれども、中々以て夫れ位のものではない、と言つて宜からうと自分は思ふ。

然らば其の大乗の教理と云ふ、所謂本體論と云ふものは、大體どう云ふ風なものであるかと、申すと、詳しくお話し申すと云ふと、逆も短時日の間には話し盡すことは出來

にくい譯でありますが、先づ大體から申すと云ふと、前に申した小乗教の上に現はれた考へとは、全るで正反對の考へが起つて來るのである、夫れはどう云ふ譯であるかと云ふと、前にお話を致した現象論と申す側であると云ふと、差別に現れて居る姿の上だけで宇宙を説明するのである、之れを譬へて申すと云ふと、宇宙を海に譬へる、海と云ふものを、現れて居る姿の上から見ると云ふと、高くなつたり低くなつたりする波より外はない、海を姿の上から見ると云ふと、ウネく波打つて居る、其の波より外に海の姿と云ふものはない、其のウネつて居る所の、高くなつたり低くなつたり、大きくなつたり小さくなつたりする處の、波打つて居る處の姿の上だけで海と云ふものを説明して見ると云ふと、これはどうしても矢張り、無常と云ふより外はない、矢張り變化より外はない、無常と云ふとをかしいか知らぬが、變化、一時一刻もヂツとして居るものではない、

い、暫くの間も海と云ふものは沈靜して居るものではない、始終動いて居る、高くなる時もあれば低くなる時もある、漣のやうになる時もあれば、或は小山のやうになる時もある、實に千變萬化、暫くの間も休止することはないと云ふのが海の有様である、今茲に鏡を研いだやうな綺麗な海であるかと思へば、夫れが暫くの間も保つものではない、見て居る間に、船を覆すやうな大浪が起つて來る、富士山のやうな大きな浪が起つて來る、盛んなものである、そんなら其の盛んな浪も長く續くかと云ふと、盛んなと思つて居るうちにピタツと隠れて了ふ、變化を言へば海の有様のやうなものはない、海と云ふものは千變萬化すると云ふより外に海の真相はない、千變萬化も暫らくの間も止まることがないと云ふことになつて見れば、ソコにはどうしても、厭世的の考へが起る、頼みにはならないものぢやと云ふ考へがソコに起つて來る、其の頼みにはならないものぢ

やと云ふ考への起るのは、ホンマに真相を見破つた考へである、夫れをお互ひの上であつて見ると、さう云ふ考へは更らに起らない、夫れを佛教の上で言ふと、常樂我淨の四轉倒と云ふ、四つの逆様の考へである、凡夫の心の有様と云ふものは、此の四轉倒である、逆様の考へばかり起して居る。

常と云ふのはどう云ふことであるかと云ふと、常とは常住と云ひ、少しも變化なく、イツまでも其の狀態が續くもの、やうな考へが即ち常である、お互ひの考へは夫れなんです、斯う申すと、理窟言ふ人は、そんなことはない、我々とても宇宙の變化して居るのは能う知つて居る、又現在變化して居るぢやアないかと、斯う言ひませうけれども、頭のドン底の考へはどんなものであるかと云ふと、口で言うたり、或は頭の先ッほで考へる考へとは全るで違つて、矢張り今日の狀態がイツまでも續くやうな考へで居る、老

少不定何時か分りませぬと言つて居るけれども、矢張り心の底には、自分は百年も生きる積りで居る、子も孫も此の通りに暮して行けるやうに考へて居る、夫れだから汲々として金を貯める、夫れで凡夫の考へと云ふものは、頭のドン底を叩いて見ると、常住と云ふ考へばかりである、イツまでも此のなりで續くやうに考へて居るのである、夫れが即ち常轉倒。

又一方から言ふと、我々の考へには、樂と云ふ考へがある、樂と云ふものはどう云ふことであるかと云ふと、興味のあることで、強ち軀が樂と云ふことではないけれども、人間ほど面白いものはない、言ひ換ると云ふと、世界の事に始終興味を持つて行く考へ、人世の事が面白い、此の世界の事が非常に面白いやうに思ふ、夫れを樂と言ふ、そんな事はありません、言ふ人があらう、又頭の先ッほでさうでないと考へる人もある、

あるけれども、夫れは前に申した通り、一時の現象の上、境遇の上からさう云ふ考へが起ると云ふまである、心の底には矢張り、此の世界の事に興味を持ち、縦令苦しくても矢張りソコに興味があるのである、唯だ面白い事ばかりではない、樂な事ばかりではない、難儀なことがあつても苦しいことがあつても、其の苦しい中に幾分か興味を持つて居る、又夫れでお互ひは紛れて居る、大體我々の心のトントのドン底には、どんな人の心の底でも、學者であらうが智者であらうが、理窟を能く言ふ者であらうが、政治家であらうが、どんな人であつても、心のトントの奥底はどんなものであるかと云ふと、實に心淋しうて仕様のないものである、即ち眞闇なものである、これはマア能く考へて見たなれば、どんな人でもソコに合點が行くぢやらうと私は思ふ、自分のトントの心の奥底は、どんな心持ちであるかと云ふと、トンと自身が考へ込んだ曉には、淋しい考

へより外はありはしない、一寸先きは闇のやうな心の状態である、自身がどうなるのやら斯うなるのやら、少しも先きに明りが見えない、夫れも永い先きの事ではない、五分の先きが、どうなる事やら、ドツチ向いて行くのやら、薩ッ張り分らない、實に我の心の底と云ふものは、誠に淋しい力のないものである、大きく言うたら、能く考へたら泣くより外は仕様のないやうなものなんです、さう云ふのが總ての人間の心の奥底にはあるのである、あるのであるけれども、夫れが少しも氣が付かぬ、さう云ふ所に自分の自覺が出来ずして、ウカ／＼として、イツまでも生きて居るやうな考へで、毎日働いて居ると云ふのは、何んでさう云ふことが出来るかと云ふと、世界の事に興味を持つて居るからである、即ち自身の前にある物の爲に、今云うたやうな淋しい心が紛らかされて居る、心の本當の底は痛くて叶はぬのである、泣きたうて叶はぬのである、夫れを

さうとも思はず、辛いとも思はず、日暮しの出来るのは、何んで出来るかと云ふと、紛れるものがあるからの事である、今此に小さい子供があるとすると、その子供が切れ物を持つて居つて傷をする、痛いから泣く、痛いに違ひない、泣くのはホンマである、ソコへ其の子供の、平生極く好いて居る處の玩具を與へると云ふと、其の玩具に紛れて了うて、泣くの忘れて了ふ、痛さを忘れて了ふ、前にある物の方が面白いから、夫れに紛れて了うて一時痛さを忘れるからである、然るにその玩具を取上げて了ふと、又直きに泣き出す、泣くの忘れたのは痛みが去つたんぢやない、自身の傷が癒えたのではない、傷もあり痛みもある、けれども泣きの止んだのは、其の前にある物に紛れるからである、お互ひが丁度夫れと同じ事なんです、此の紛れ物を少しも自身の方へ寄せ付けず、唯だ自分のみを能く考へて御覽なさい、實に一寸先きは眞闇で、淋しうて仕方がない、夜中

自分が色々考へて見ると自分の身の上の事、或は子の事、孫の事を、段々考へ込むと後には淋しい、何んとも言うて見やうのない心になる、夫れがホンマの心なんです、夜が明けて世間の仕事に掛ると後生の事も忘れ、未來の事も忘れ、自身の救はれると云ふ側の事は一切忘れて了うて、唯だ慾のみに紛れて、夫れが面白い面白いと言うて、ウカウカ暮して行く、夫れは世界の事柄に興味があるからである、其の證據には、平生元氣の好い活潑に働く人でも、可愛くて仕やうのないと云ふやうな子供を死なして御覽なさい、其の死なした瞬間と云ふものは、此の世界の事の興味と云ふものは薩ッ張り無くなつて了ふものである、そこで變な心になる、モウ金を儲ける張合ひもなければ、働く勢ひもなくなる、自身の財産はどうでも宜い、有つても無くつても宜い、此の子供の命さへあれば宜い、斯う云ふやうな考へになつて了ふ、なぜさう云ふ考へになるかと云ふと、

子供が死んだ爲に世界の事に興味がなくなつて了つて、そこで心の痛みが出て来たのである、夫れであるからして我々が、樂なやうな考へを持つて、世界程面白いものはない、人生より面白いものはないと思ふのは、即ち轉倒した、逆様の考へである、夫れが即ち樂轉倒である。

我と云ふは、ワレと云ふ字であるけれども、これは自在の義、今日で言ふ自由の義である、自由自在、人生程自由自在になるものはないと思ふ考へ、即ち人生に於て満足と云ふことが出来ると思ふ考へを持つて居る、夫れが我である、でこれも誰しもある考へである、人生で満足と云ふものが得られると思ふ、夫れぢやから藻掻くのである、藻掻くけれども、人生其の物は自由と云ふものはないのである、ドコへ行つても不足と云ふものが付いて廻るものが人生である、これが人生の有様である、夫れぢやから、人生其

の物はドコまで行つても不足である、其のドコまで行つても不足であるものを捉まへて、自在な事の出来るやう、満足する事の出来るやうと云ふ考へを起す、満足せにやならぬ満足せにやならぬと、ドコくまでも追はへて行く、満足々々と言つて追はへて行く、夫れぢやから益々不満足である、世界の事柄に、満足を得られると云ふことは少しもある譯のものぢやアない、夫れを満足の得られるものゝやうに思つて騒ぐ、其奴が所謂我轉倒。

淨と云ふのは清淨なもの、綺麗なものと思ふ考へ、これもマア能う考へると、をかしい話である、我々が一體綺麗とか汚いとか云ふのは、トンと譯の分らぬものである、人間の肉だと思ふと非常に汚いものゝやうに思ふ、人間が死んだら死骸に觸れるのも汚なく思ふ、まして況んや、人間の臟腑であるとか、腸であるとか云ふやうなものは、實にど

うも嘔吐を催すやうに汚く思ふ、成程汚いに違ひなからう、さうかと思ふと、魚は頭からカブリ付いて喰べる、牛肉のあの血の付いた物を旨がつて食ふ、又雲丹であるとか海鼠腸であるとか云ふ、腸の腐つたやうなものを、好い味だとか何んとか言つて喰べる、實に譯が分らぬ、夫れと同様で、お互ひ此の人間は、薄紙のやうなもので汚い軀を包んで居るが、夫れも其の紙の外へ、中の汚いものが見えにや宜しいけれども、始終洩れて来るではないか、毛の孔の中から始終洩れて来るではないか、涕が出る汗が出る、實に汚なくて堪つたものではない、其の汚なくて堪つたものでないものを、綺麗な物のやうに思つて、大切にして行くのである、これ轉倒にあらずして何んぞ、何れ間違つた考へである。

斯う云ふ常樂我淨と云ふやうな考へに坐り込んで居るのが、即ち此のお互ひの本質で

ある、夫れで之れを凡夫の四轉倒と云ふ。

ところが小乗教の方から言ふと、此の四轉倒と云ふものを打ち破つて了ひ、世界の本當の真相は、前に申す通り、無常なものである、常住な物はない、髪の毛一本取出しても常住ではない、細かい砂一つでも常住なものはない、時々刻々と變化して、移り變つて行くものである、ドコを捜しても無常なものである、宇宙ドコまで行つても無常なものである、これはホンマに違ひない、決して嘘ではない、厭世とか何んとか言ふけれども、何んでも彼でも無常である、厭世が悪いか樂天が悪いか知らぬけれども、そんな事は別な話、無常と云ふことは間違ひのない話、世界の真相は即ち無常である、無常であるから、樂と云ふことのある譯はない、興味のある譯はない、夫れを興味のあるやうに思つて居るのは間違つた話、今日は人生々々と云ふけれども、人生の目的とか人生の意

義とかと言ふけれども、人生と云ふものに、目的のあるものでも無ければ意義のあるものでもない、夫れを意義のあるやうに思ひ、目的のあるやうに考へるのは間違つた考へ、夫れは世界の真相を見破つたことのない人の話、世界の真相を本當に能く考へて見れば、値打ちも無ければ意義もなく、何んにもありはしない、夢の中の夢の仕事なんです、ぢやから樂はない、非常非樂、今日の世界の事柄と云ふものは、何から何に至るまで、満足を得られると云ふものは一つもない、自分の自由の利くものは何んにもありはしない、電車が出来たら、夫れで何んでも自由になるやうと思つたが、出来て見ると必ずしもさうでない、鐵道が出来たら、モウ交通の不便は無くなるやうに思つたが、出来て見れば夫れ程にもない、總ての事が其の通りで、出来る後から不足と云ふものが従いて廻るのである、夫れと同様に、金さへあつたら自分の自由が利くやうに思ひ位置があつたら

自由が利くやうに思ふけれども、金が出来位置が出来ると、又後から不足が従いて來るのである、イツまで經つても同じやうなことを繰返して居る、ドコまで行つても不自由なものである、そこで非常非樂非我非淨、皆非の字が付く、これが即ち小乗の上で、世界の真相を見破つた上で起る處の考へ、これは間違ひのない話、強ち小乗教で言ふだけの事ではない、世界の真相は實に此の通りに違ひない、然るに是れが大乗になると云ふと、全るで正反對であつて、元の常樂我淨に返つて了ふ。

第五 支那の佛教(中)

前述の如く大乘になると、小乗で、非常非樂非我非淨と云つたものが、今度又常樂我淨となる、けれども此の大乗の上で、常樂我淨と云ふのは、四轉倒と言つた常樂我淨ではない、我々の上にある考へは、四轉倒即ち轉倒心である、大乘の上に現はれる常樂我淨は、これは即ち轉倒ではない、我々の本性の徳がソコに現はれるのである、言葉は同じ事であるけれども、意味は非常な違ひになるのである。

どうして此の、非常非樂非我非淨と謂はれたものが、反對の常樂我淨と云ふことになるのであるか、ドチラか間違ひであらう、非常非樂非我非淨と云ふのが本當なら、常樂我淨は間違ひでなければならぬ、常樂我淨が本當なれば、非常非樂非我非淨は間違ひでな

ければならぬ譯である、けれどもこれは眼の著け處が違ふからである、夫れだからドチラも間違ひぢやないのである。

前に海の譬へを申しましたが、姿の上から申せば前申す如く、海はドコまでも變化するものである、一時一刻も靜止して居る時は無いのである、始終變化々と動いて居るものであるのです、夫れは姿の上から見たのである、浪と云ふ姿の上に眼を著けると、始終動いて居るやうである、ところが海の本體の上に眼を著ける、即ち水と云ふものに眼を著けて見た時には、少しも變化と云ふものはあるものではない、どのやうに高い浪が起つて居らうが、どのやうに低い浪が起つて居らうが、鏡を研いだやうな綺麗な海も、山の崩れるやうな勇ましい有様も、潮水と云ふより外はないのである、イツ眺めて見ても潮水、少しも異つた處はない、私は常に譬へに言ふことであるが、あの朝顔の花で

ある、あれは見様によつてはどうでも言へる、誠に短い花であるとも言へれば、誠に永い花であるとも言へる、朝飯前に開いて、朝飯食べて了ふ頃には萎んで了ふ、其の邊から見ると、あれ程命の短い脆い花はない、僅か一時間位咲いて居るか居らぬか位の花である、眞に短命な花である、けれども又朝顔と云ふ全體の上からして之れを言ふ時になると、あれ程命の長い花はない、梅雨期の中頃から咲き出して秋の彼岸過ぎまで、毎朝咲き代り咲き代り咲く、あれ程永らくの間咲いて居る花は他に例がないと言つても宜い位である、此の短いと見るのも長いと見るのも、ドチラも間違つたことぢやない、ドチラモホンマなんである、花一輪だけに眼を著けて見ると、今申す如く極く壽命の短い花である、實に情ないと云ふより外はない、自分が永らくの間骨を折つて培養したのに、ア今朝咲いたかと思へば、モウハヤ萎んで了ふかと、斯く思ふと涙がこぼれ

る、此の一輪の花を咲かす爲には、何十日と云ふ永らくの間掛つて培養した、夫れが爲めに朝早く起きて、晝も碌々休まず、肥料を遣つたり草を採つて遣つたのである、漸く今朝花が咲いたかと思へば、モウハヤ萎んで了ふ、これ程實に情けないことはない、モウこんな花は再び作らないと、斯う思ふ、切めて半日でも咲いて居つて呉るれば、幾らか樂しむことも出来るけれども、ホンの煙草二三服喫ふ間の命しかない、實に情けないことである、こんな詰らない花はモウ作らないと、斯う云ふことになつて来る、けれども朝顔全體に心を置いて考へることになると、朝顔ほど樂しみの多い、永く樂むこと出来るものはない、夫れだから骨折つて朝顔を培養することになる、外の花であつて見れば、永くて二週間か三週間しか保たない、然るに朝顔は三ヶ月位の間は、毎朝々々、咲き代り咲き代り、種々の色の花が咲いて、實に麗はしいことである、考へて見ると

誠にどうも長い命の花で、興味の多い花であると言ふことになる、夫れと恰度同じ事なんです、宇宙萬有も種々の因縁で現はれる差別の姿の上に眼を著けて考へることになると、世界は前申す通り、ドコまでも無常なものである、けれども其の本體と云ふものに眼を著けて考へることになりやア、イツまで經つても變らぬ、イツまで經つても少しも變りはありはしない、無始曠劫以來盡未來際を通して、少しも變るべきものではない、其の變らぬと云ふのは、變化のなりで變らぬのである、そこで是れ程又興味の多い樂みの多いものはない、恰度朝顔の花と同様であり、代り代つて永らくの間續くのである、そこで本性本體と云ふ上に本當に眼が著けて見れば、此の宇宙ほど面白いものはない、此の世界ほど面白いものはないのである、此上もない樂みのある所である、死ぬ生きると云ふことは、夫れぢやから樂みなんである、興味なんである、死んだら未

來は、變化々と變化して、幾らでも續くのである、變なくして續くばかりでは面白くないけれども、アチラへ死んで生れコチラへ死んで生れ、猫にもなつたり犬にもなつたり、人間にもなつたり天人にもなつたり、金持ちにもなつたり貧乏人にもなつたりして無窮に變化す、これ程面白い話はない、

來て見ても來て見ても又同じ事

ちよつとこゝらで死んで見ようか

これ位面白い事はない譯である、そこで即ち樂である、常なると共に即ち樂である、即ち極く興味のあるものである。

また極自在なものである、なぜ自在なものであるかと云ふと、自身の心の外には何もないのである、本體と云ふ方の側に眼を著けて見ると、自身より外に異つたものは一つ

もない、總てが皆自身中のものであるから、自由の利かぬと云ふことはチツともない、一切物の自由と云ふことはどこにあるかと云ふと、物が二つに分れて居る處に自由と云ふことのあらう譯はない、どのやうに事が發達して來ても、どのやうに物が發達しても、自身が相對的になつて居る間は、自身の自由はありはしない、どうしても自分の思ふ通りと云ふことになる譯のものぢやない、物が一つになつて了つた處に自由が利く、一切總ての事が皆自分の心の中の物柄であると云ふ譯になる、夫れぢやから自分の心の思ふ通りになる事が出来る、夫れで本當に悟りの境界に入らぬことには自由と云ふものは利かない、我々が迷ひの世界に相對的の物となつて居る間は、自分の自由と云ふものはどこまで行つても利く譯のものではない、自身の本體より外はない、所謂天地一枚、宇宙一枚と云ふことになつて、ソコに初めて自由と云ふものが現はれるのである。

そこで小乗の上で、非常非樂非我非淨と謂はれたものが、大乘の上になつて來ると云ふと、常樂我淨となるのである、其の常樂我淨となつた所が、自分の上に具つて居る所の徳相である、どう云ふ譯で大乘になるとさう云ふことになるかと云ふと、前に申す如く、本體と云ふものに眼が著くことになる、これは小六ヶしい話であるけれども、其の本體と云ふものはどんなものであるかと云ふと、佛教で眞如と云ふ符牒が付けてある、眞如と謂はれるやうな小さなものではないけれども、夫れより言ひやうがないから眞如と云ふ符牒が付けて居るのである、一切總ての物は皆眞如である、宇宙間に有と有らぬる物は眞如ならざるものはない、譬へて言ふと海の水のやうなものである、海の水と云ふものは、どんな高い浪でも、どんな低い浪でも、水より外はない、眞に平等である、眞如と云ふ本體の上に眼を著けて見ると云ふと、どこからどこまで行つても眞如である、

眞如以外の物は一つもないのである、即ち自身を主として言ふ時には、自身より外はない、ドコからドコまで行つても、皆自身の心の影より外はない、自身の身の物より外はないのである、そんなら其の平等な物がどうして斯う云ふ差別を現はして来るか、即ち一面の潮水が、どうして高い浪と低い浪とに現はれて来るかと申すと云ふと、あの差別の浪の起るのは、風と云ふ縁から起るのである、夫れと恰度同様に、宇宙間に此の種々様の差別の起つて来るのは、即ち縁によつて起つて来るのである、即ち事情と云ふものである、事情と云ふものが加はれば、どんな物にでも現はれる、人間とならなければならぬ事情が加はると、人間になつて現はれる、佛にならなければならぬ事情が加はれば、人間であつたものが今度佛になる、山であつたものが、今度川にならなければならぬ事情が加はれば、即ち川になる、川であつたものが山にならなければならぬ事

情が加はれば、今度は山になる、そんなやうな具合で、物柄は異つたものではないけれども、事情都合によつて種々様々な差別と云ふものが現はれて来る譯である。

ところが今日の人にこんな話をする時、信仰も結構である、自身も信仰がしたいけれども、乍併佛様が有るやら無いやら分らぬぢやないかと云ふ様な人が大分多いのであるが、其の佛様と云ふのは今申すやうな譯で、事情によつて現はれるもので、佛の上で言ふ佛様と云ふのは、事情によつて現はれる、所謂現象的の靈人格である、禪宗などで凡夫即佛など言ふ佛様とは少し振合が違ふ、眞宗などで言ふ西方世界に現在しますく佛様は事情によつて現はれた現象的のものである、夫れはどう云ふ事情でどう云ふ具合に現はれて来るのであるかと云ふと、前に申す如く、一切總ての物は是れ眞如と云ふ、眞如と云ふはどう云ふとであるかと云ふと、眞實如常、今日の言葉で言ふ所の無

無限絶對である、無限絶對と云ふのはどう云ふことであるかと云ふと、どんなものにもなることである、事情さへあればどのやうなものにでもなると云ふのが、即ち眞如と云ふことである、斯う云ふ物には成るけれども、あア云ふ物には成らぬと云ふやうなことでは、有限と云ひ相對と言はんければならぬ、無限絶對と云ふのは、限りのない、對待のないものを云ふのであるからして、どんな物にでも成れると云ふのが、夫れが即ち無限絶對である、無限絶對と云ふのは消極の言葉であるが、積極の方の言葉で言ふと圓滿と云ふ、圓融とも言ふ、圓滿と云ふのはどう云ふことであるかと云ふと、何も彼も揃うて居る、モウ有りたけの物が揃うて居る、揃はぬと云ふことはないのである、揃はぬ物までが揃うて居る、夫れが圓滿である、斯う云ふやうに何も彼も具つて居るのが圓滿である、夫れが即ち眞如である、其の眞如と云ふものは別の物ではない、今日の此の

儘が眞如である、此の軀のなりが眞如である、此の白墨も眞如である、夫れで何んにでもなる、ソコを能う考へて御覽なさい、此の物に事情さへ加はれば何んにでもなる、四角いものにもなれば、圓いものにもなる、長いものにもなれば短いものにもなる、大きなものにもなれば小さなものにもなる、形のあるものにもなれば形のないものにもなる、事情次第でどのやうなものにでもなると云ふのが、宇宙間總ての物の本性、即ちお互ひの本性、餘所の話ではない、山の話でもなければ川の話でもない、猫の話でも犬の話でもない、お互ひの心が即ち其の眞如である、どんなものにもなる、此の白墨で申してもさうである、これは何んにでもなる、事情さへ加はれば、即ち化學的の作用を之れに加へて御覽なさい、斯う固形體のものが即ち浮氣體にもなり、或は流動體にもなる、如何なる物にでも變化する、夫れは何から變化するか、即ち事情である、化學

の作用である、そんな事を言ふと、木が金になるかと言ふに、木が金になるかも分らぬ、木が金になる事情が加はれば成らぬと云ふことは出来ない、今は其の事情が分らぬだけのことである、石は金にならないと云ふのは、石の金になる法を發明せぬ間の話である、石の金になる方法を發明すれば金になる、其の方法は發明の出来ないものであると云ふことは斷言は出来ない、これからどんな方法が發明されないとも限らぬ、今日は發明されないだけで、これから先きはどんな方法が出来ないとも言へぬ、其の方法さへ出来て事情さへ加はれば、石が金になる、現在今日の事柄を能う考へて御覽なさい、無線電信の出来ない先きには、そんなものは出来ない、あれは針金があるから傳へることが出来るのだ、針金なしに出来る譯のものではないと言つて居つた、ところが針金なしに出来るやうになつた、空中を飛んで歩く、そんな馬鹿な事が出来るものかと言つて居つたが、

今日では立派に飛行機が出来た、我々の軀の中にあるものを軀の外から見ることが出来るか、そんな馬鹿な事が出来る譯はないと言つて居つたが、今日ではエックス光線で見ることが出来る、佛様の光り、そんなものがあるものか、化け物のやうなものではないかと言つて居つたが、今日ではラヂウムと云ふやうな光りが出来た、我々の眼には見えぬけれども、實際偉大なる働きをする光りを發見した、さうすると佛様の光りも無いとも言へない、そんなやうな具合で、宇宙間有りと有らゆる總ての物は、斯う云ふ物にはなるけれども彼ア云ふ物にはならぬと云ふ、そんな其の限りのある譯のものぢやない、事情さへ加はればどんな物にでも現はれて來ると云ふのが、宇宙總ての物の本性である、眞如と云ふのは即ち其の事なんです、夫れでお互ひの心も矢張り眞如である、お互ひの心も無限なもので、事情さへ加はればどんなものにもなつて生れる、現在教育を施せ

ば、何も知らぬ者が物を能く知る事が出来る、馬鹿と謂はれた者も賢くなる、低能兒と
言うて何んともして見やうのない、これまで棄て、了つた者が、今日では低能兒の教育
法が段々發明せられて、低能兒も段々教育が出来るやうになつて来た、啞が物を言ふこ
とは出来ぬけれども、能く物事を辨ずることの出来るやうになつて来た、盲目が字が書
けるものかと言つて居つたが、今日では盲目が字を書く事が出来るやうになつた、だか
ら事情の加はり次第に、どのやうなものにでも成らぬと云ふことはない、どんな物にで
もなる、そこでお互ひの此の心でも、佛になるべき所の事情を加へれば、即ち佛になる、
八萬四千の相好を具へて、十方世界に光りを現はす所の微妙莊嚴の佛様に現はれて来る、
そんな物は有る譯はないと云ふなれば、即ち無限絶對と云ふことを否定した話で、佛教
のみならず、今日の哲學でも無限絶對と云ふことを言ふではないか、其の無限絶對と云

ふことを言ふならば、立派な佛様が現はれると云ふことや、結構な淨土が現はれると云
ふことは、決して否定することは出来ない、立派な佛様に現はるべき因縁さへ與ふれば、
粗末な我々の軀が、極く清淨微妙な軀になつて現れ、不自由で仕やうのない娑婆世界が、
自由圓滿な極樂淨土に現はれると云ふことは、出来ない譯はない、そんなら夫れが出来
るものぢやとして見れば、已に我々以前にさう成て居る人がある筈である。

一體此の宇宙間のものとして云ふものは、理があれば必ず事がある、事があれば必ず理が
ある、理と云ふのは、所謂、眞理である、事と云ふものは現象である、現象があれば必
ず其の現象の現はるべき眞理がソコにあるのである、だから眞理のあるものなれば、必
ずソコに現象があるに違ひない、近頃の人の言つた言葉であるが「事實は必ず眞理、眞
理は必ず事實」と云ふ、ツイ此の間或る支那人の言つた言葉である、ソコに眞理があれ

ば、必ず夫れが事實なんである、我々の眼に見えぬだけの話である、早く言へば、此の世界で眞理であるならば、他の世界に於ては事實になつて居る、無線電信の如きもさうである、無線電信のまだ設けられない田舎では、斯う云ふやうにすれば音信を傳へることが出来る云ふ眞理である、けれどもさう云ふ眞理があれば、一方には已に夫れが事實になつて居る、理窟の上から考へて居るのは此の邊の人間だけである、向ふ方の人間は已に夫れを事實にして實驗して居る、夫れで、眞理があれば即ち事實がある、事實があれば即ち眞理がある、事理と云ふものは不二なものである、分れる譯のものぢやアない、夫れだから我々が佛になると云ふ道理があれば、他の一方に於て已に事實になつて居らんければならぬ、事實になつて居るから、茲へ眞理になつて現はれて居るのである、夫れぢやから我々の眼には佛様は見えぬけれども、見える方の側では已に事實である、

夫れであるからして、佛様がないの極樂がないのと云ふのは、誠に淺幕な考へ、一體自然の眞理に矛盾した話である、哲學の方で無限絶對と云ふことを言ふではないか、一方で無限絶對と云ふことを言ひながら、一方では、佛様や極樂、そんなものがあるものと云ふのは、夫れやア極く小さい了簡と言はんければならぬ、だからお互の心と云ふものは、事情の加へ次第で、どうでもなる、斯うしかならぬものであると云ふやうな、そんな狭苦しい小さいものではない、實に微妙不可思議なものである、お互はどのやうな結構なものにでも現はれて來ると云ふ寶物を持つて居るのである、其の寶物を持つて居りながら、寶を寶として使ふことを知らないのである、夫れでどうしたら寶にすることが出来るかと云ふと、其の寶にする法を聞いて、其の法によつて、其の事情を加へて行けば、即ち寶が現はれて來るのである、夫れぢやから此の修養と云ふことが極く大切な

事である、今日修養々々と云ふことを言ふのは夫れなんです、修養次第でどんなものにも成ることが出来るのである、さう云ふものでありながら、夫れを棄て、了つて少しも修養を加へないと云ふのは、實に情けない話である、其の修養が自身で出来ないといふものであつて見れば、ソコには即ち勝方便があつて、如來の慈悲によつて自然に我々の心の中に修養の効果を與へられる法がある、所謂信仰と云ふものである、自身の力で修養の出来ぬものは、信仰の方に向ひ、信心で修養をすることが出来る、夫れに少しも心を用ひずして、打棄て、置くといふのは、實に情けない次第である、夫れで修養とか信仰とか云ふことは、精神界の方で申すときには、實に大切な事であるのです、大切なのみならず、棄て、置くことは出来ない、棄て、置いたら我々は鬼になる、なぜであるかと云ふと、鬼になる方は、我々は毎日々々知らずくの内に其の事情が加はつて居る、

知らずくの間に心の底に、其の事情が加はつて行くからして、此のなりで行つたら、鬼になつて現はれるに違ひない、夫れを考へると、此の修養とか信仰とか云ふことは、棄て、置ける譯ではない、ヂツとして、何んにもしなければ、此の儘居れると云ふのなれば、棄て、置いても宜いけれども、さうではない、悪い方の側の事情は始終加はりつあるのである、さうして一方の善い方の側は、少しも加へることがないと云ふことになつて見れば、鬼にならずに居られる譯はない、夫れで此の修養と云ふことは、是非致さんければならぬ譯である。

乍併前に申したやうに、我々の心は極く微妙なもので、修養さへ積めば佛にでも理はれる、宇宙萬有皆自身の心の中のものである、死ぬの生きるのと云ふことは、實にこれは興味である、と斯う言うて見れば、誠に面白い、實に氣の利いた、實に高尚な話で

ある、けれども、話を聞いた時に、面白いとか高尚なとか思ふだけのことであつて、事實に當つて見た時には、薩ツ張り譯の分らぬものである、少し氣の利いた人の理窟話、理想的の極く高尚な風の話と云ふものは、今日の人の氣に入る、極く低い、爺さん婆さんが涙を流して聞くやうな話は、一向氣に入らないといふ風の有様であるが、併し其の氣の利いた、自身が愉快と思はれるものは、自身が本當に考へた時には、夫れが實際の用に立つものか立たぬものか、ソコは又大いに考へて見なければならぬ。

私の朋友に、漢籍塾に一緒に居つた人で、永らくの間官吏になつて居つて、随分吏才のある人がある、夫れが近頃はスツカリ止めて了つて、財産も相當にあるから、毎日毎日お寺詣りばかりして居る、爺さん婆さんと同じ事に説教詣りをして、どんな説教でもこんな説教でも有難い〜と詣つて居る、一三年前に私が行つて、今日茲で話し

たやうな話をした、さうすると其の人が言ふには「お話は誠に結構であるが、併し私共には分りませぬ」と言ふ、私には、其の分らぬと云ふのが分らぬ「どうして分らぬか」と云ふと、「イヤどうしてと云ふことはないが、どうも分らない」と言ふ、をかしい事である、あれ程書物も読み、詩も作れば文章も書ける人間でありながら、今日自分の話が分らぬと云ふのはどう云ふことであらう、さう六ヶしい事を話した譯ではない、誰にでも大抵分るやうに思つて話したのであるから、あの人に分らぬと云ふ譯はないのである、夫れが分らぬと云ふのはどう云ふものであらうかと、合點が行かないだ、夫れから段々と自身の上に經驗をして見た處で、初めて其の人の分らぬと言つた味ひが私に分つた、成程、天地一枚になるとか、宇宙一枚になるとか、常樂我淨であるとか云ふことは、聞いて見れば面白い、其の常樂我淨と云ふ文字が分らぬのではな

い、天地一枚と云ふことも其の言が分らぬでもない、宇宙一枚と云ふことも、所謂理窟や意味に於ては分る、理窟や意味に於ては分るけれども、さて其を自分の今日の此の心の上へ持つて来て考へることになると分らない、本當に味はひが分らない、死んだり生きたりするのは面白いやないかと言つた處で、夫れが自分の心に本當に面白いか、そんな都合には中々行かぬ、貧乏しようと思つたらうと、そんなことは何んともないと、口では言つても實際になると云ふと、貧乏すれば是れ程辛い事はありはしない、宇宙一枚、天地一枚と言つて見た處で、自身の心の上に確かに當て、見て、其の宇宙一枚の心持ち、天地一枚の心持ちには、薩ッ張りなれない、成程あの人分らぬと言つたのは御尤も千萬なことであると思つたことである、これは皆さんはどうであるか知らぬが………

ぢやから自身の今日、實際心の中に、本當の味はひの分らぬことは、之を自身の實行の上に現はさうと云ふことになる、何んにも役に立たぬ、理窟や興味があると言つて見た所で、何んにもならない話である、けれども夫れが世間には多い、氣の利いたらしいことを聞いて、氣の利いた事を言ふと、大變面白いやうに思ふ、けれども夫れが本當に心に分つてないと、まさかの時には役に立たぬ、平生は夫れで宜しい、實際の場合に臨んだ時には何んにもならぬ、人の子の死んだ時には、子供はよく死ぬもんだ、氣の毒な事だ位で済まして行くことが出来るけれども、さて自身が可愛い子供を死なした時はどんなものであるか、そんな事を言つて居れる譯のものぢやア決してありはしない、どうも自身の心に本當に合點が行き、本當に味はひが知れてないと云ふと、實際の物の役には立つ譯はないのである、ソコになると、爺さん婆さんと、少し書物を讀

んだ髻を生やした人と、ドツチが偉いかと云ふと、ドツチが偉いか分らぬ。

嘗て、藝州の三次と云ふ所へ行つて、五日間講習をした、ところがあそこに一人の不具者が居つて、足が二本一緒に引ッ付いて、物も本當に言へず、耳も本當に聞えぬと云ふ、極く哀れな不具者である、夫れが又非常に佛様のお慈悲を喜ぶ、實にマア無我と言つて宜しい、朝から晩まで分らぬ口で、南無阿彌陀佛々々々々と言つて居るが、其の南無阿彌陀佛だけは分るが、外の事は薩つ張り分らぬ、夫れが母親に負はれて毎日聞きに来た、聞きに来たけれども、耳が聞えないから本當に聞けないのであるけれども、さういふ信心家であるから、自身の心に描いて喜ぶのであらうと思ひます、夫れが或る日講話の濟んだ後で、私の休憩して居る處へ来て話すには、口で話すのではない手眞似をして話すのである、「此の講話の席へは澤山な人が来て居る、髻の生え

た人が始終筆記をして居る、けれども夫れは斯う斯うである」と手眞似をして右の手で鼻の下の髻を撫で、右の耳から左の耳へ聞いた事が突き抜けて了ふと云ふ様を示し「耳から耳へ抜けて了ふから何んにもならない、けれども自分はさうではない、自分は何んにも分らぬけれども、之れと是れと斯うである」と、拇指を示して胸を叩き、前でピツシヤリ兩掌を合せて「佛様と私の胸とが一つになつて居る、夫れぢやから、落ちる奴を斯うして救つて下さる」と、上から念珠を落して下でヒヨイと兩掌で受けた、妙なものである、何んにも物知らぬものであるけれども、ソコになると、佛様のお慈悲が十分心に味は、れて居るものと見える、さうして少しも心の中に動揺と云ふものはないのである、實に朝から晩まで佛の慈悲の光が胸の中に輝いて居るからして、自身の軀はさう云ふ軀であるからして、世界の上には興味もなければ、又うるさい考

へも薩ッ張り起らない、其の加減か、不具者でありながら、實に其の顔付の柔和なことは何んとも言へない、厭らしいと云ふやうな所は少しもない、下卑たやうな有様は少しもない、實に麗はしい顔をして居る、私共から見ると廿五六に見えるが、幾つかと云ふと四十二ぢやと云ふ、ウキウキして、ニコニコ笑ひながら念佛を唱へて居る、夫等は、何んにも氣の利いた理窟は知らないけれども、兎に角佛の御慈悲と云ふものが、自身の胸の中に納つて居るから、どんな目に逢うても、少しも夫れでうろたへるの、夫れで迷ふのと云ふやうなことはないのである、さうならなければならぬ、夫れに較べて見ると、我々は誠に恥かしいことであると思つたことでもあります。

乍併 右に申した人は世界に用のない、世界と全く縁を切つて居るから宜しいけれども、我々はさう云ふ具合には行かぬのである、けれども矢張り、世界の事に交りつゝ、

右の不具者同様に、胸の中に佛の慈悲が一杯充ち満ちて、その心で世界の事が活潑に出て来ると云ふ所まで行かんければ、本當の妙好人と云ふことは、言へまいと思はれるのであります。

夫れで此の我々の精神界に於ては、修養と云ふこと、信仰と云ふことが極く大切な事であつて、修養の出来ない人は信仰から行けば、必ずソコに修養が出来る譯である、唯だ説教ばかり聞いた處で、自身の心の上に、實際に味うて行くと云ふことのない以上は、何んにもならない譯である、何んにもならない譯はないけれども、直接には何んにもならない、夫れが因縁となつて、後には夫れによつて立派な修養が出来ることと云ふことがありますけれども、直接には、聞いたばかりで心に味ふと云ふことがなくちやア仕様がないのである。

第六 支那の佛教(下)

前にお話した通り、支那では大乘佛教が發達した、大乘佛教は哲學で申すと本體論である、本體と云ふことになる、是れまで無常と見たものが即ち常住となる、苦と見たものが樂となる、全るで現象論の上で考へる時とは正反對なものになつて來る、通例は、死ぬと云ふことは厭になるとか、或は貧乏することが厭になるとか云ふやうな感じであつたけれども、さて本體と云ふ上に立つて眺める時になると、死ぬと云ふことも誠に興味のあることである、貧乏と云ふことも左程厭なことではない、其の代り金があると言つてもさう喜ぶべきものでもない、皆夫れは、或る事情で大きな海の上に出來た浪のやうなものである、浪と云うては分りにくいから知りませぬが、大海の上に出來た泡のやう

なものである、其の泡が消えたと言つても何んともない、自身の本體が即ち海のやうなものであつて見れば、其の上に浮き上つて來た其の泡が消えた出來たと云うても、何んの關係もない、夫れで金があつても金が無いと云うても、左程變る譯のものではない、乍併、理窟を聞いて見れば其の通り、道理の上からして言うて見ればそんな譯であるけれども、實際自身の心の上になつた時になると、道理の上で説く通りになるかと云ふと、中々其んな具合には行かない、と申すものは、平生實際に當らずに考へて居る時と、實際に當つた時とは、非常に違ふものである。

明の雲棲、これは大變名高い人で、禪と念佛とを一緒にして佛法を弘めた人である、今日でも臺灣に行はれて居る佛法、朝鮮に行はれて居る佛法は皆此の雲棲の流れを汲んで居る、よつて今日は大體から言ふと、支那朝鮮臺灣の佛法は、雲棲流の佛法と言つて

宜しい、今日まで其の餘徳が残つて居ると云ふ位な人でありますからして、中々立派な人であつた、其の人の書き残されたものは『竹窓隨筆』を始め澤山ございますが、其の人の謂はれた事に、

自分は或る日、小僧が風呂が沸きましたと案内に來たからして、風呂場へ行つて裸體になつて、風呂桶へ這入らうとする時、どう云ふ拍子か風呂の中へ踏み外して落込んだ、ところが其の時湯の加減が見てなかつて、非常に熱い湯であつた、殆んど沸騰點に近い湯であつた、其の中へ落込んだ、サア熱いの熱くないの、どだいどうも堪つたものでない、其の時始めて、物と云ふものは實際に當つて見ねば役に立たぬものであると云ふことが分つた。

と云うてあるが、熱いものは熱い、冷たいものは冷たいに違ひないと、斯う云ふやうな

樂な考へで居る、此の身體は五蘊假和合のものである、假りに或る物と或る物とが寄つて現れて居るものである、焼けやうが沈まうが、さう大した譯のものではないと、理窟の上から考へると、そんな事も言へる、けれども、さて此の熱い湯の中へ實際這入つてからと云ふものは、中々熱いなどと言つて居られる譯のものではない、どだい堪らないのである、ぢやから物は實際に當つて見んと云ふと、其の味ひの分るものではないのである。

先達でも、これも藝州でありましたが、非常に佛法を信する人であるが、國會議員の選舉競争に關係して猛烈に運動した、ところが到頭其の結果選舉法違犯と云ふので、牢の中へぶち込まれた、さてさうなつて見ると云ふと、平生思つて居つたのとは薩張り考へが違ふ、何んともかんと云うて見やうのない心地を感じるやうになる、平生

は國家の爲であるとか國民の義務であるとか言うて居たけれども、さて自身が實際牢の中へぶち込まれて臭い飯を食はんければならぬと云ふことになる、一種言ふに言へない心持ちになつて來る、妙なものでありますと言ふ話であつた。平生理窟の上で考へたり、道理の上からして思つて居つたものが、實際の上で當つた時には、夫れが何んの用をも爲さないものである。

夫れで大乘の教理が如何程立派な教理であらうが、如何ほど面白い高尚な道理であらうが、道理で聞いたり講釋で聞いたりして幾ら面白いものでも、事實夫れが實際の役に立つかと云ふと、中々さうは行く譯のものではない、そこで其の、大乘の教理で説く所は、極めて高尚な、極めて面白い道理であるけれども、夫れが自身の上で事實として現はれると云ふまでには、即ち修養をせんければならぬ、唯だ話として聞いて居る時は所

謂理想と云ふものである、現實ではないのである、其の現實と理想とが一致すると云ふのには、自身が修養を積んで行かんければならぬ、修養の上からでなければ、現實と理想と一致すると云ふ譯には行かぬ、これが所謂修養の肝要なる處である、佛教で言ふと、修行と云ふものが肝心な所である、修行をせずに唯だ空論だけでは何んの役にも立たない。

さて修行と云ふことになる、と云ふと、どう云ふ具合であるであらうか、一體修行をする、と云ふのはどう云ふ修行をせんければならぬか、修行と云ふのは、理窟の上から言ふと何でもなし話である、我々の此の心の悪習を斷ずる、迷はぬやうにする、別に六ヶしい譯ではない、煩惱即ち菩提、何んにも煩惱と云ふものを取つてのけなくちやならないと云ふ譯ではない、たゞ心を持ち直すまでのことである、小さい處に眼が著いて居る、

夫れが煩惱で、夫れが大きくなれば菩提である、別段に物柄の變つた譯ではない、變つたものを持ち出す譯ではない、理窟の上から言ふと斯んなやうなもので、修行と云ふものは何んでもない話である、けれども夫れは理論的の話で、小さい處に我々の心が括られて居る、其の括られたものを突き放して、此の心を大きくせいと、斯う云ふと何んでもない、誠に心易いやうに思へるけれども、實際に當ると云ふと、小さい所に括られて居る心を、大きい處へ突き放すと云ふことは、中々容易に出来る譯のものではない、これが自由に出来るならば、世界はさう八釜しくない、マア我々の上で考へて見ても、男の考へと女の胸の中とは非常に違ふ、夫れの中には、女でも偉いお方もあるけれども、マア大體に就いて言ふと、男と女との間は幾らか心の大きい小さいの違ひがある、男であると、世界を自分の家のやうに思つて、朝から晩まで社會へ飛び出して、種々様々の

人に出逢ひ、變つた事柄に出逢つて、苦しい事は苦しいけれども、兎に角相手が大きくなつて、随つて自身の心も大きくなる、小さい自身の家の中の事は、さうえらい氣にも掛けず、竈の下の灰の掻きやうが悪いと云つても、疳癩は起らない、茶碗の洗ひやうが悪いと云つても、サホド自分の胸の中が痛むと云ふことはありはしない、けれども女の方であつて見れば、朝から晩まで小さい家の中に住んで居るから、其の家だけを自分の世界と思つて、イツも同じやうな顔を眺め、同じ事柄に従事して居るからして、心が小さくて、境遇も極く狭い、随つて心も極く狭い、狭い心で見るとあるからして、何んでもないやうな事が非常に氣に障る、下女が言ふ事を聞かぬと云つても疳が起る、竈の下の灰の掻きやうが悪いとか、飯櫃の洗ひやうが悪いとか、茶碗の置き方が違つて居るとかと言つては腹を立てる、夫れが爲に始終喧嘩が起る、家の中の事柄と云ふもの

は、根本を考へて見ると何んでもない詰らない話、夫れが非常に腹を立てる元になつて居る、夫はなぜであるかと云ふと、小さい心の人同士が寄るものであるからさうなる、そこで男から考へると、實に氣の毒なものである、あんな馬鹿な詰らぬことに疝癢を起す、腹を立てる、茶碗の置きやう箸の置きやう位が悪いからと言つて、さう腹を立てんでも宜ささうなものぢやと、斯う思ふやうであるけれども、女の人であつて見れば中々さうは行かない、佛の眼から我々を見ると矢張りさうなものである、佛の眼で御覽なされると云ふと、我々の境涯は、極く狭い小さい所に括られて居るのである、夫れぢやから詰らぬ事に慾を起し、人を殺して見たり人を瞞して見たり、何んでもないやうなことに、大變な大騒動を起すやうなこともある、大きな心を持つてござる佛の眼から御覽なされたらさてく憐れ千萬なことであらうと思ふ、修養のある人であつて見れば、一寸心を持ち

直すと云ふやうなことは、何んでもないやうに思はるゝであらうけれども、我々凡夫であつて見ると、中々さうは行かぬ、詰らぬ小さい心、障子一枚開ければ梅の花が咲いて居る、鶯が鳴く、何から何まで眼を慰め耳を喜ばせる、年が年中楽しんで暮すことが出来る、夫れに詰らぬ箸の置き方がどう斯うとか、灰の掻き方が悪いとか言つて疝癢を起す、詰らぬぢやないか、少し心の持ち方を直したらどうぢやと、男からは思へるやうなものであるけれども、女の方では中々さうは行かぬ、夫れぢやから、理窟から言つて修行と云ふものは何でもない、悟りと云ふことは何でもない話であるけれども、さて實際になつて見ると云ふと、中々そんな具合に行く譯のものではない、そこで一つ修行をせんければならぬ、世間で言ふ修養と云ふことをして行かんければならぬ、其の修養をすると云ふことになる、そんならどうすれば修養が出来るかと云ふと、佛教の本當の原則で言

ふと、戒定慧と云ふ、戒と申すのは即ち道德上の規律である、道德上の規律をよく守つて行くのを戒法を持つと云ふ、言葉を変へて申すと、我々の身なり口なり意なりを、眞理に嵌めて行くのが即ち此の戒法である、定と申すのは此の心を鎮めるのである、我々の心が差別の境涯に於て、損ちや得ちやと、さう云ふやうな相對的に色々騒ぎ立つ所の此の心を、鎮めるのが即ち定である、畢竟するに我々が、朝から晩まで使つて居る頭の中で湧き出す所の心の波、此の心の波を鎮めるのが即ち定である、慧と云ふのは智慧のことである、智慧と云ふのは絶対の知識、學校で教へるやうな知識ではない、絶対の知識、即ち物の本體に體達した——智慧なんである、この三つのものが是非共揃うて行かんければならぬ、宇宙萬有の本體に到達すると云ふのは、今申す絶対の知識が現はれて來んければ、前申すやうな、高尚な面白い理窟が事實の物とはならないのである、

そこで智慧と云ふものが第一番に大事である、我々の本體を見る、其の光りが智慧である、外のお宗旨で、眞如法性を見る、或は主人公を見る、本來の面目を見ると云ふ、言葉は違ふけれども、大體を言へば同じやうな譯である、即ち我々の此の本性の光りの出たのが夫れが即ちお悟りである、其の本性の光りと云ふものは、所謂絶対の知識と云ふものからして現はれて來るものである、夫れを譬へて言ふと、池の水が鏡のやうに澄み渡つて居る、其の處へ有らゆる影がスツカリ映る、其の有らゆる物柄を水面に寫すと云ふのが、今申すやうな光り、即ち絶対の智慧である、夫れで其の池の水が鏡のやうに澄んで、一切總ての物がスツカリ映るやうになるにはどうすればさうなるかと云ふと、浪立つて居る浪が、ズツと納まつて了はぬことには、鏡のやうな具合に、どんな細かいものでもスツカリ水に映すと云ふ譯には行かない、水面が動いて居ると云ふと、物の當り前

の姿が短かくなつて映つたり、長くなつて映つたりする、或は四角いものが圓うなつたり、圓いものが三角になつたりして見える、更に其の浪が大きくなりますと、モウ長い影も短い影も何んにも見えぬやうになる、唯だ上に現れるものはピカ／＼光る光りだけである、少しも物の姿は見えぬやうになつて了ふ、そこで鏡のやうにスカツと一切の物柄が映ると云ふやうにするには、水面の浪立たぬやうに、スカツと鎮めなければならぬ、定と云ふのは夫れなんです、我々の此の頭の中に起る處の浪を鎮めて了ふ、鎮めて了ふと、ソコに玲瓏たる絶對の光りと云ふものが現れる、即ちお互が時々刻々使つて居る處の此の心の光り、即ちコップを見て、これはコップだと云ふことを知り、藥罐を見て藥罐だと云ふとを知る、即ち物を見たり物を聞いたり物を考へたりする我々の此の心の働きは、矢張り絶對の光りが、心の浪の爲に、圓い奴が四角や三角になつて現れて居るの

である、譬へて言ふと、十五夜の月が海に映るやうなもので、或は三角に映る處もあれば、四角になつて映る處もあり、或は唯だピカ／＼したものになつて映る處もあるやうなものである、同じ一つのまん圓い月であるけれども、浪の爲に色々な形になつて映る、お互の心も矢張りさうである、まん圓い光り、所謂絶對の光りがあるけれども、頭の中で色々動くからして、絶對の智慧が片々たるものになつて現はれるのである、で此の心をチーツと鎮め返すと云ふと、其のまん圓い絶對の智慧の光りが現はれて来る、煩惱即菩提と云ふのはソコである、其の時に宇宙萬有の本體、即ち自身の本性と云ふものがスツカリ見えるのである、今日お互ひが夫れが見えぬのは、即ち浪の爲に見えないのである、そこで本當の絶對の光りを出さうと云ふのには、頭の浪を鎮めなければならぬ、これが定である、所謂坐禪と云ひ、觀心觀法と云ふもの即ち

是である、さて心を鎮め浪を鎮めるにはどうすれば宜いかと云ふと、即ち自身の軀を規則に入れて置かんければならぬ、頭だけ鎮めると云ふ譯には行かぬ、お互が一寸心を鎮めると云うてもさうである、軀を横にして居ては心は鎮まらぬ、眞直ぐに心を落附けようと思へば、矢張り軀も正しくして居らんければならない、そこで戒法と云ふものが必要、能く昔の人が譬へて置いたことでありまするが、戒法と云ふものはランプのホヤのやうなものである、定と云ふのは、其のホヤによつて火の動かぬやうになつたのである、焔が動かぬやうになれば明りが一室に遍満する、光りが一室のドコ／＼までも届くやうにしようと思へば、焔の動かぬやうにせんければならぬ、焔の動かぬやうにしようと思へば、上からホヤを被せんければならぬ、夫れと恰度同じ事で、絶對の光りを出さうとするには、心を鎮めんければならぬ、夫れには軀を正しく持つて、規則通りにして

行かんければならぬ、斯う云ふ譯であるからして、この戒定慧と云ふことは、佛法の修行で非常に八釜しいことである、ところが此の戒定慧と云ふものはどうすれば修するこゝとが出来るか云ふと、「坐禪するなら四條五條の橋の上」と云ふ話があります、夫れはよく熟した上では出来るであらうが、初からして四條五條の橋の上で出来る譯ではない、どうしても本當の坐禪をしようと思へば、極く誘惑物の少い、自身の心を騒がすものに縁の極く遠い所へ行かんければならぬ、牛肉を鱈腹喰べて、酒を仰山飲んで、坐禪の出来る譯のものではない、慣れた方はどうか知らぬが、初心の者はさう云ふことでは出来ぬ、夫れぢやから勢ひどうしても山の中に這入らんければならぬ、理窟の上では少しも厭世ではないのであるが、厭世でない所まで我々が達せんと思へば、矢張り厭世的行動を一度探らないと云ふと可けない、今日若い者が學問をするのは、社會へ出て活動を

する爲である、そんなら勉強するにも町の眞中で大騒ぎに遣つた方が宜いかと云ふと、そんな事は出来ない、活動する爲の學問ではある、けれども其の學問をする間は、活動以外に軀を置かんければならない、夫れだから東京あたりの學生は、始終下宿を變つて歩く、成るべく静かな所、成るべく誘惑の少い所、書物の讀める處を選んで變つて歩く、これも厭世と言へば厭世なんである、夫れと恰度同じやうなものである、社會へ出て人民を救ふ爲の佛法であるけれども、社會へ出て人民を救ふことの出来るやうになるには矢張り一度は社會を離れて遣つて見なければソコに行くことが出来ない、自身の心が誘惑せらるゝやうなことでは、人を救ふと云ふことの出来る譯はない、道綽禪師の安樂集の中に、

若身居ニ不退ニ已去、爲化ニ雜惡衆生ニ故、能處ニ染不レ染、逢レ惡不レ變、

如ニ鵝鴨入レ水、水不レ能レ濕、如レ此人等、堪ニ能處ニ穢拔レ苦、若是實凡

夫者、唯恐自行未レ立、逢苦即變、欲レ濟レ彼者、相與俱沒、如ニ逼レ鷄

入レ水、豈能不レ濕、

と云ふ語がある、又明の陳白沙の語にも、

旋渦底ノ佛、安能救ニ落水ノ羅漢、

と云ふ言がある、旋渦底の佛と云ふは、迷の渦の中へ落ち込んで居る佛と云ふことで、即ち我々が此のなりが佛であると氣張つて居るけれども、此の儘が佛でも、此の佛が自ら煩惱渦の中に落ち込んで居りながら、どうして上から水の中へ落ちる羅漢が救へようかと云ふのである、だから人を救ふと云ふのは、自身が人から救はれる世話のないやうにならんければ出来ないことで、都合によつたら自身が人に救つて貰はんければならぬ

と云ふやうなことで、逆も人を救ふと云ふことは出来ないのである、夫れに人を救ふ救ふと騒いで廻つた處で、本當の事は出来ない、今日宗教者が、社會事業である救濟事業であると言つて騒ぐ、夫れは一面から言ふと誠に結構であるけれども、また一面から言ふと、自分が矢ッ張り救はれる仲間のである、自分が水の中に落ち込んで居ながら、却つて人を救はうと言つて騒いで廻る、慈善々々と言ひ、救濟々々と言つて居る人間が、却つて監獄の御厄介になり警察の御厄介になることがある、嘗て元の警保局長が三年の懲役の宣告を受けたと云ふことである、これは獨り警保局長に限つたことではない、今日の救濟事業慈善事業に従事する者は、往々にしてさう云ふ有様になる、夫れであるからして、一旦山の中へ這入ると云ふと、大變厭世のやうに思へるけれども、本當の仕事は仕ようと思へば、夫れでなければならぬ、「四條五條の橋の上」で人を救ふと言つても、

先づ自身が十分修し上げた上でなければ人を救ふと云ふことは出来ないのである、そこで今日の僧侶などが、仕事と云ふことに眼を著けて、仕事を仕ようくと云ふ考へを持つて居る、私は大に間違つて居ると思ふ、仕事と云ふものは佛法の上に於ては方便である、本當の信仰と云ふものを餘所にして置いてさうして方便の仕事にばかり掛つて居つては、到頭夫れが爲に自身は落ちて行かんければならない、で先づ自身の信仰から第一遣らんければならぬ、社會事業は立派な事は出来ずとも、切めて自身の信仰だけは動かないやう、誘惑されないやうにして置かなければ、社會事業にしても慈善事業にしても本當の事は出来る譯はない。

さう云ふ譯であるからして、支那の人間が佛法の哲學的の方の側は非常に發達を致して、立派な理論を説き、立派な理窟を言ふやうになつた、即ち大乘佛教と云ふものは非

常に發達をして來たが、さて其の大乗佛教の立派な理論高尚な理窟を事實にすると云ふ事になつたら、どうすれば出来るかと云ふと、矢張り印度流である、印度流でなければ出来ぬ、教理は非常に立派に出来、理窟は非常に立派になつたが、さて實際自身の胸の中が、言つて居る理窟通りになる乎否、即ち我は水の上に湧いた泡のやうなものである、消ようと消まいとも自身には何等關係はない、貧乏しようと金持ちにならうと、そんな事は頓著しない、と云ふやうに成り澄ますことの出来るのは、どうすれば宜いかと云ふと、矢張り山の中へ這入らんければならぬ、山の中へ這入つて一生涯の仕事、一生涯どころではない何程掛るかも分らないのである、中々一年や二年の修行で行く譯のものではない、十分眞面目にソレを遣つて行かんければならぬ、理窟の方ばかりを考へて行くことになると、それが疎かになつて來る、煩惱即菩提と云ふ考へになると、ナアに

酒飲んでも構はぬぢやないかと云ふ譯になる、議論がえらい高尚になると、夫れが爲に自身の修行と云ふものが碎けて了ふと云ふことになり易いものである、夫れで或る學者の如きは、大乘の教は結構なものであるけれども、これは羅漢のする仕事であると言つて居られる、これは至極尤もな話であると思ふ、お互は矢張り小乗の教へによつて此の戒定慧と云ふものを眞面目に修して行かんければならぬ、此の小乗の修行の濟んだ人が羅漢と云ふものになつて、さうして今度大乘に手を付けて大乘の仕事をすると思ふのがこれが佛法の極である、と云はれた、これは至極眞面目な論であると思ふ、どうしてもお互の上にては、高尚な理窟ばかり言つても本當の仕事は出来るものではない、勝手手の好い處には理窟を使ふ、勝手手の悪い所には一向無頓著である、惠心僧都の言葉に、『煩惱即菩提と言つて魚を食ふ者はあるけれども、生死即涅槃と云つて火の中へ飛び

込む者があるか」と云はれたことがあるが、煩惱即菩提と云ふのは、大變自分に都合が
好い、魚を食つたり酒を飲んだりするのに大變都合が好い、其の好い方は遣る、さて生
死即涅槃、死ぬことは何んでもないと云うて火の中へ飛び込むことは、中々出来るもの
ではない、これは其の通りである、夫れで支那の佛教は、理論の上では非常に立派に發
達したが、さて實際の修行と云ふことになつて來ると、矢張り印度流である、一口に
言へば禪宗……禪宗と云ふものは大分振合ひが違つて來るけれども、要する處印度の風
儀が離れないのである、其の證據には、禪宗の寺は、あの景の好い山の中に在る、あれ
が證據、禪宗の寺の門を這入ると、モウ心が變るやうである、あア云ふ所へ這入つて、
社會の事をスツカリ打忘れて了ひ、天上界へでも行つたやうな心持ちになつて修行をす
るのが、禪宗の特色であるのです、あれは誠に結構であるけれども、矢張り人生を離れ

人生を遠ざかるのであるからして、夫れが即ち矢張り印度流であるのである、夫れで理
論は非常に支那で發達したけれども、實行の方の側になると、矢張り印度流を免れぬ
と云ふのが即ち支那の佛法である。

ところが日本へ來ると、ソコが大變に違ふ、理論は支那に於てモウ十分に發達して此
の上手の指して見ようもない所まで立派に開發顯示せられて居る、そこで日本へ來ては
實行と云ふ方の側が始めてズーツと發達して、世間即佛法と云ふやうに發達をして來たの
である、夫れで日本の佛教は、どのお宗旨でも支那とは違ふ、中には幾らか支那流のも
のもあるけれども、日本へ這入つて來てからは支那とは振合ひが餘程違ふ様になつた、
要する處極く實行的である、お互ひの此の社會の生活を離れず、ソコに直ぐに佛法が
現はれるやうになつて來た、ソコは印度人や支那人の出來なかつた處であるが、日本

人は前にも申す通り、何物を持つて來ても、直ぐに今日の實際の間に合ふやうにする
と云ふ特性を持つて居ります、そこで佛法が來るが早い、直ぐにさう云ふ處へ眼を著
けた、随つて日本の佛教と云ふものは、餘程他の國の佛教とは振合の違つたものになつ
て來た、で其邊の處を日本の人民は能く了解して貰ひたいのです、耶穌教などゝ違ふと
云ふ處はソコにあるのである、日本の國體に能く合すると云ふ處はソコから來るのであ
る、今日まで日本の國民道徳と云ふものを養成し來つたと云ふことはソコから來たので
ある、支那の佛教其の儘では、逆ても日本の國民道徳を今日まで養成して來ると云ふこ
とは出來る譯ではない、國體に極く適合すると云ふやうな風になつて來たのは、支那の
佛法其儘では中々さうは行かない、夫れで日本の聖徳太子のお手に這入つて、其のお手
によつて、前に申す如く、世間即佛法と云ふ譯になつた、信ずる方の側から言へば、

これによつて自身が濟度される、生活をして居る其の儘直ぐに救濟に預ると云ふことが
出來るのである、弘める方の側から言へば、其儘が直ぐ國家を擁護すると云ふことにな
る、夫れが即ち日本の佛教であるのである。

第七 日本の佛教(二)

聖德太子に就ての總述

前申しました通り、日本人と云ふものは、餘り哲學思想と云ふものはないと言つても宜いやうな譯で、古來からして日本に哲學者と云ふものはない、日本人の發明した哲理と云ふものは格別立派なものはないのである、中にもマア天台宗と云ふお宗旨、即ち叡山のお宗旨が天台宗とは申して居るけれども、實は支那の天台とは薩ツ張り振合が違つたものである、幾らか其邊の處に於て支那とは異つた所の哲學思想と云ふものが見られるやうではありまするけれども、乍併能く吟味して見ると云ふと、日本で初めて現はれたものではない、矢張り支那のものがコチラへ來て眼に立つやうに現はれて來たと云ふに過ぎないのであります、矢張り根本は支那にあるのであります、弘法大師の眞言宗、

此の中には、弘法大師の發揮であらうかと思はれる處も見られぬではない、けれども夫れを能く吟味したら、矢張り支那のものであるかも知れない、古來からして即身成佛と云ふことに就て、六大無碍と云ふことを説くのは、弘法大師の發揮であると云ふことにする人もあれば、矢張り支那からの傳來であると云ふ人もある、古來學者の間に其の説は一致して居らぬやうである、一方から見ると云ふと、弘法大師の發揮らしい所もあり、實際弘法大師の發揮されたものであつて見れば、日本唯一の哲學であると言つても宜い、又一方から考へると、どうも支那流の處があるから、或は支那から來たものかも知分らぬ、支那から來たものとすれば、別段日本で發明したものとも言へない、儒教に於ても亦其の通り、日本に於て支那にない處の學説が現はれたと云ふことは如何にしても認められない、徂徠と云ふ人のやうな學問もあるけれども、あれも全るで日本の産物と

云ふことは言ひ難い、どうも理論哲學と云ふ側では、さう外の國に向つて誇るやうな立派なものには餘り認められない、夫れは日本人の本來性質が、哲學と云ふ側に特長を持つて居らないからのことであらう、乍併實行の方の側になると云ふと、最前申す通り、實に大和民族の特長として、外の國民に見ることの出来ない技倆があるのである、殊に外の國から來るものは、どの方面から這人つて來るものでも、一ト度日本人の手に這入つたら、直ぐに日本人の現在の生活の上に必ず適合するものに遣り直して了ふと云ふ技倆がある、其邊は實にえらい、實に立派なものなのである、佛教も亦其の轍で、日本人の手に這入ると云ふと、直接今日の生活の上の間に合ふものとして説き弘めると云ふ譯になつて來る、即ち世間即佛法と云ふことが、事實の上には現はれるやうになつた、支那の中にも、極く微細に吟味すれば少しもさう云ふ風の處がないとは申されぬ、けれども

日本の方に比較すると、無いと云うても宜い位の譯である、理論の上では、支那でも矢張り世間即佛法と云ふことになつて居る、煩惱即菩提と云ふやうな譯で、此の社會の事に従事して行く、ソコに即ち佛法と云ふものが現はれるのでありますから、社會の仕事をして居る其の儘が佛になる所の修行となると云ふやうな道理は、已に支那の佛法の上に現はれてあるけれども、夫れは理論だけで、理論通りに事實がなると云ふことは、前に申すやうに、ソコに一つの修養を積んで行かんければならぬ、其の修養と云ふ方の側になつて來ると、自然人世と離れなければならぬ譯になつて來る。

ところが日本へ來ると、唯だ理論の上にてさう云ふ譯になるのみならず、修行の上實際の上に、直ぐに、社會の仕事が即佛法と云ふことに現はれて來るので、ソコが日本の佛教の特色と申しても宜からうと思ひます、これが理論の上から申すと、法華經の上に

は今申したやうな思想が始めから終ひまで一貫してズツと現はれて居る、聖徳太子はどのお経を御尊敬なされたか、どのお経をお弘めなされたものであるかと云ふと、法華經をお弘めなされた、どう云ふ譯で法華經をお弘めなされたかと云ふと、法華經は今申す通り、世間即佛法と云ふ教理から現はれて居る、言葉を換へて言へば、今日我々の生活の儘が即ち佛法と云ふことになる、さう云ふお経であるからして、聖徳太子が特に選んでお採りになつたものであらうと思ひます。

一體どう云ふ譯で世間が即佛法となるのであるか、今日お互の社會の生活的の仕事が直ぐに即ち佛になる所の修行と云ふことになるかと申すと、最前も申した如く、大乘佛教の極意と云ふものは、一切總てが即ち真如である、言葉を換へて言へば、本體の現はれて來た、宇宙間に有りと有らゆる總ての物は、宇宙の本性が縁に觸れて現はれて來た

ものである、即ち海の上に起る處の浪のやうなものである、一の潮水、其の潮水が、風の縁に出逢うて、高い浪にも現はれ低い浪にも現はれる、色々差別はあるけれども、其の本體の上から眺めると、一つの潮水に過ぎない、潮水以外に何んにもない、潮水の上に眼を著くれば、高いと云ふこともなければ、低いと云ふこともない、小さいと云ふこともなければ、大きいと云ふこともない、同一の潮水が動くに過ぎぬのである、大きいから大變値打があると云ふこともなければ、小さいから値打がないと云ふ譯のものでもない、小さくても大きくても同じ浪です、同じ水が動くのである、小さい浪の水でも、大きい浪の水の備へて居るだけの徳は備へて居る、例へば此の藥罐の中にある水も、海の中にある水も、水と云ふ點から言へば少しも異つた處はない、海の水の備へて居るだけの徳は此の中の水にも備へて居る、海の水にはどんな徳があるか、水の徳と云ふもの

は數へ出せば色々ありますが、お經の中にも水の徳は種々様々に説かれてあるが、先づ我々の一番よく分る處で言ふと、此水の徳と云ふものは、二萬噸三萬噸と云ふ様な大きな軍艦でも浮べると云ふ、物を浮べると徳がある、夫れから、如何なる物でも潤すと云ふ徳がある、これは誰れの眼にも直き分る處である、これだけの徳は、海の水にもあれば藥罐の中の水にもある、ぢやからして、海の水も藥罐の中の水も、その分量に多少の差はあれども値打から云ふと同じ事なのである、宇宙總ての物が皆其の通り、大きな物に値打があつて小さな物に値打がない、高い物に値打があつて低い物に値打がないと云ふことはない、どれもかも同じものである、我々の如き有情と云ふものゝ上から言へば、佛も凡夫も、其の本性の値打の上から見れば、少しも違つたことはない、なぜかと申せば、佛も眞如である、衆生も眞如である、其の眞如と云ふものはどうでもなるもの、何にで

もなるものである、佛の縁に觸るれば佛になる、凡夫の事情が掛れば凡夫になる、縁さへ掛りやア何にでもなる、佛の値打も我々の値打も、少しも異つたことはない、一切總ての物が値打の違ふと云ふものは一つもない、玉は結構である、瓦は値打がない、夫れは我々の上で言ふ話である、玉其の物も縁に觸るればどんな物にでも變化するものである、瓦も其の通り、事情さへ加はればどんなものにもなる、ソコから見れば少しも異つたものはないのである、夫れであるから、此の我々のする仕事も、菩薩方のさつしやる仕事も、佛様の爲さる仕事も、仕事其の物の上には何も異つた處はない、同一の物即ち眞如が縁に觸れて現はれたのである、其の物の本性の上から云へば少しも異つた譯のものではない、お經を讀むのも小便桶を擔ぐのも、値打に異つたことはない、説教するのも算盤持つのも、本性の上から云へば異つたものではないのである、其の事情が違ふからして振合ひが異つて

來るだけのものである、物柄は同一のものである、そこで『治生産業皆是實相』我々の生活の仕事其の儘が即ち實相である、佛の徳相が現はれて居るのであると申しても好い、小便桶を擔いで居る姿が佛の徳である、算盤持つて商賣するのが佛の徳である、念珠を持つて佛様を拜むのも佛の徳である、其の佛様と云ふのは眞如の事を云ふのである、眞如法界の現れである、ぢやから宇宙間、何一つ取つて除ける物もなければ、何一つ除けて掛るべきものもないのである、皆んな其の物の上から言へば同一なものである、世界中總ての物が、少しも値打の異つた物もなければ、劣つたものもないと言はんければならぬ、之を即ち妙法蓮華と云ふ、妙法蓮華と云ふ法と云ふのは、宇宙間に現はれて居る總ての物が法なんである、世間で云ふ教法、あの法とは意味が違ふ、妙法蓮華と云ふときの法は、物柄と云ふことなんである、宇宙間有りと有らゆる總ての物柄は、如何

なるものであるかと云ふと、妙と云ふより外はない、此れ以上何とも言へぬ結構なものである、夫れぢやから佛ぢやと云ふ、妙と云ふのは佛と云ふこと、夫れを形容して蓮華と言ふ、蓮華と云ふは少しも垢の付かぬ、誠に清淨無垢なるものである、宇宙間總ての物は皆妙である、皆蓮華である、斯う云ふ譯から妙法蓮華と云ふ、お悟りの眼から見たら其の通り、所謂本性を見貫く力があれば、一切總ての物が其の通りである、我々は其の本性を見るだけの力がない、種々様々の是非善惡の現はれた物の本性を見貫く眼を持つて居るならば、姿はどんな姿であらうとも、皆悉く妙法蓮華である、一つとして汚れたものもなければ、一つとして粗末な物もないのである、皆妙である、佛である、其の道理をお説きなされたのが即ち妙法蓮華である、其の妙法蓮華と云ふ上から言へば、山の中へ這入らにやならぬと云ふ譯もなければ、谷合へヒツつまんければならないと云

ふ譯もない、必ず佛様の前に跪いてお禮をせんければ佛法にならないと云ふ譯ではない、算盤はじいて居るなりが即ち佛法と言はんければならぬ、小便たご擔いで歩いて居るなりが即ち佛法である、總てが皆法界の徳の現はれである、ソコから言ふと、何んにも棄てる物もなければ除ける物もない、此の儘で宜いのである、此の儘で宜いけれども、我々凡夫は此の儘で宜いと云ふ處が見えずして、其の色々に差別をして居るその差別の姿だけが見えて、其の姿に括られて居るから、仕様がな、妙法蓮華とは言へない、妙と云ふのが分つて居ない、蓮華と云ふのが分つて居ない、物の本性から言へば、總てが妙法蓮華で、世間即ち佛法であるけれども、其の世間即佛法と云ふことになるには我々の眼を換へて行かんければならぬ、我々の心を振り替へて行かんければ、即ち妙法蓮華となつて來ない、ソコになると一寸六ヶしいことになつて來る、ぢやから支那の佛法は世

間即佛法と云ふ道理は成り立つた、其の道理で説くけれども、其の道理が事實になると云ふに就ては、我々の眼の換るやう、我々の心の換るやうにして來なければ、一切總ての物の徳が現れる處に行かずして、唯だ縁に觸れて現はれて居る姿や、働きだけしか眼に著かぬからして、どれもかも同じ物である、どれもかも結構なものであると云ふことは言へない、ソコが日本になつて來ると云ふと、支那のやうな、山の中へ這入つたり、谷合へヒツ込んで修行をせんでも、今日商賣をしながら、妙法蓮華に直ぐ適ふやうになり、百姓をして居るものは百姓をして居るなりで、直様夫れが妙法蓮華に適ふやうになつて來るのが、即ち日本の佛教であります。

そこで聖徳太子は妙法蓮華經に依て佛法をお弘めなされた、夫れから日本の佛教と云ふものは弘まりて來たことになつて居るが、一體どう云ふ御精神からお弘めなされたの

であるかと云ふと、此の佛教で以て國家を擁護する、國民道德を養成する、斯う云ふ御精神からお弘めなされたのである。佛教で日本國民の道德を養成すると云ふは、どうしてさう云ふことが出来る譯のことであるか、商賣其の儘が佛法になつて行けば、其の商賣は誠に麗はしい商賣である、百姓其の儘が佛法と云ふことになれば、其の百姓は實に立派な百姓である、總ての事が道德的になり、百姓も道德的になり、商賣も道德的になり、何事も此の道德的になつて来る、一切社會が道德的になりさへすれば、日本の國家と云ふものはどうしても發達せんければならない、どうしてもソコに皇室と云ふものを大切にしてい、一々其の命令を奉ぜんければならない譯になる、そこで此の佛法を弘めると云ふことは、即ち聖德太子がお弘めなされた御手許から言ふと、此の佛法を以て國家を鎮護しよう、と云ふお精神であつたのである、聖德太子が三寶興隆の詔をお出しになつて寺

を御建立になる時に『君親の恵みに報いんが爲め』と云ふ言葉が日本書紀などに出て居る、君の恵み、親の恵みに報いる爲にお建てなされたお寺である、お弘めなされた佛法である、君の爲め親の爲め、言葉を換へて言へば所謂忠孝、忠孝道德と云ふものを發揮する爲に、寺をお建てなされたのである、佛法をお弘めなされたのである、これが即ち日本の國家を擁護するものである。

そんなら支那のやうに、山へ這入らず谷へ行かずして、商賣のなり百姓のなりで直ぐに夫れが佛法と云ふことになるのはどうしてなるか、茲が即ち日本に至つて初めて發達したと云ふことが言へるのである、當り前から言ふと、矢張り山の中へ這入らんければならぬ、谷合へヒツ込まんければならぬ、然るに山へも這入らず谷へも這入らず、さうしてする仕事が一々妙法蓮華と云ふ綺麗なものになる、即ち眞理其の儘に百姓が出来る

商賣が出来ること云ふことは、どうしてなるかと云ふと、要する處、此の胸の中さへ變れば宜い、此の胸の中を變へると云ふのは、どうすれば宜いかと云ふと、汚らしい心を美しい心にするのである、要する處、我利々々根性を入換へて、君の爲め國の爲めと云ふ心になし換へて来て心が清淨無垢なものになれば、それが世間即佛法と云ふものである、山へ這入らずとも谷へ這入らずとも、其のまゝ心を入れ換へることが出来る方法があるかと云ふに、夫れはお釋迦様のお説きなされたお經の中に澤山説いてあるけれども、支那人の眼には著かなんだ、日本人は何んでも直ぐに實際の間に合ふやうにしたいと云ふ考へが頭にあるから、日本人の眼で見た時には、直ぐにさう云ふ點に眼が著いたのである、夫れはどう云ふ處であるか、篤敬三寶、篤く三寶を敬へ、と云ふことは、言葉を換へて言ふと、本當に如來様を有難う思へと云ふことである、本當に如來様が有難うなれ

ば、山の中へ這入らずとも、谷の中へすくまいでも、自身とする仕事が一々佛恩報謝となつて來るのである、君の爲め親の爲めと云ふことになるのである、ぢやから本當に如來様が有難うなり、佛様のお慈悲が有難いと云ふ、其の信仰に立つて仕事をするに云ふことになりやア、百姓を止めるにも及ばぬ、商賣を止めるにも及ばぬ、一切總ての此の千差萬別の仕事をして居りながら、其のまゝ、即ち所謂佛法に適ふことになる、佛のお悟りに入る處の道に適ふ譯になつて來る、そこでソレが直ぐに此の日本の國家を擁護すると云ふ譯になつて來る、茲が日本に至つて特に發達して來た處であるのである、要する所は、所謂篤敬三寶と云ふことが大事である、眞に佛様が有難うなると云ふことが一番肝要である、佛様が有難いと云ふ心が起らなければ、我利々々根性、自分の慾ばかりを考へる様になる、我利々々根性では決して國家の爲に成る譯はない、社會の爲になる譯

のものではない、ぢやから日本の佛教は、如來様が本當に有難うなると云ふことが一番大事である、要する處日本の佛教は、言葉を換へて申すと云ふと他力的である、支那の方は所謂自力的である、其の他力法と云ふものが日本に於て非常に發達した、なぜ他力になるかと云ふと、眞に佛様が有難いと云ふことは、他力にならんければならない、自分が自分を用立てると云ふやうな考へのある間は、心の底から有難いと云ふやうな心は中々起るものではないのである、眞に如來様のお徳が有難いと云ふことになるのは、自分と云ふもの、役立たぬことが本當に自覺が出來て、この落ちるより外はない者を佛のお慈悲で此の度は救はれると云ふ處に非常に感謝の心が起つて來る、斯う云ふことにならない、眞に御恩を感謝するといふことになれば、其の眞に御恩を感謝するといふ心にな

つた其の一念と云ふものは、少しも垢はないのである、少しも心に垢のないやうになつた處が、夫れが即ち妙法蓮華であるからして、本當に如來様の有難くなつた人を「是人名分陀利華」是の人を分陀利華と名づく、親鸞聖人は仰せられた、分陀利華と云ふのは白蓮華と云ふことである、梵語の儘で言ふから分陀利華、夫れを翻譯すれば蓮華、詳しく言へば即ち白蓮華、法華經の上では、蓮華と云ふのは即ち萬有の實相を云ふのである、總て宇宙萬有の本性の名前なんです、本性の上の名前であるけれども、本當に信心を以て、眞に佛様の御恩を感謝するといふことになつたならば、其の清淨なる本性に契ふから白蓮華と云ふものが、其の人間の徳名になつて來る、是人名分陀利華、是の人を即ち分陀利華と名づく、自身が分陀利華になつて了へば、一切の物は皆妙法蓮華に化して了ふ、悉く眞理其の物の現はれになつて來る、百姓する者は百姓のなりが眞理の現はれ、

商賣して居る者は商賣其の儘が眞理の現はれである、眞理の現はれとなつて來ると云ふと、其の當體が直ぐに國家を擁護するといふことになつて來る、なぜであるかと云ふと、佛教で云ふ眞理と云ふのは、耶穌教などで言ふ單に平等だけのものではない、佛教の眞理は、平等と共に差別があり、差別と共に平等があるから、直ぐに國家と云ふ差別的のものが現はれて來る、ソコが耶穌教など、振合ひの違つて來る處である。

第八 日本 の 佛 教 (二)

聖德太子興隆三寶の主旨

前來、日本の佛教と云ふことに就て大體をお話しいたした、日本の佛教は聖德太子がお弘めになつたと申しても宜いので、御承知の如く、佛教が公然と傳はつたのは欽明天皇の御時代であると云ふことであるが、夫れが民間に弘まるやうになつたのは聖德太子からと申さんければならぬ、尤も欽明天皇より以前に民間に這入り込んで居る形跡があるので、こんな事は今お話をするやうな事ではないが、越前に因縁のあることであるから、一寸お話をして置きます。

欽明天皇の時代に公然と日本へ佛教の傳はつたのは、今日の朝鮮即ち、三韓から傳はつて來た、三韓の佛教と云ふものは支那から傳はつた、即ち支那の佛教が三韓を経て日

本に渡つた、ところが、民間に傳はつて來た佛教、公然と朝廷の手を経て這入つたのでなくして、私に民間へ佛教の傳はつたのは支那朝鮮の系統以外に、南洋諸島から這入込んだものであらうと考へられる、夫れが即ち此の越前に一つあるのである、即ち越知山の泰澄和尚の弘められた佛教、あれがどうも系統が違ふやうである、あの系統の佛教と云ふものが、外にも大分ある、熊野の那智の觀音と云ふものは、裸行上人が持つて來て傳へたのが初めである、と云ふことである、これは紀州の名所誌にも出て居りまするが、夫れのみならず、峰の湯と云ふものが本宮の二里程奥にある、ソコに古い家があつて、其の家に傳はつて居る記録がある、ズツと昔の物歟後に拵へたもの歟知れませぬけれども、兎に角傳はつて居る、拵へたものでも、幾らか口碑によつて書かれたものであらうと思ひます、この裸行上人と云ふのはどう云ふものであるか、眞裸體で修行するから裸行上

人と云ふ名前が付いたと云ふ、那智の瀧壺の下で眞裸體で瀧に打たれて修行をして居つた、其の人の持つて來た觀音様が、夫れが即ち那智の觀音様になつたのであると云ふことである、其の裸行者と云ふものが、どうも餘程變なものである、裸體で修行をして居ると云ふのは、日本の人間とは思へない、又支那の人間とも思へない、これはどうしても南洋諸島からして來たものであらう、即ち潮流が南洋からして日本へズツと這入つて來る、夫れが恰度紀州の那智あたりで打ち留めになるからして、其の潮流に乗じて、南洋からして、船に乗つて來たか、何に乗つて來たか知らぬが、或は日本へ來る積りでなかつたが、吹き流されて來たかも分らぬ、兎に角この南洋からして熊野へ這入り込んだものであらうと思ふ、熊野には徐福の墓があります、秦の始皇の時に徐福が藥を取りに來たとか云ふ口碑がある、海外からイツもあの時分に熊野へ這つて來た、南洋諸島か

ら潮流の具合で熊野へ多く著いたものと見える、そこで其の禪行者と云ふものが、南洋の諸島からして、潮流に乗じて日本へ来た人であらうと思はれる、これがマア景行天皇の時分であると云ふと、餘程古い話である。

夫れから夫れに恰度類したものと云ふものは役の行者である、役の行者と云ふものは日本人かも知れないが、あの人の修せられた處は、今で言ふ修驗道である、ア云ふ佛法と云ふものは朝鮮から傳はつたものではない、ドツから傳はつて来たものとも分らない、これまで役の行者が修行をして、修行の結果孔雀明王呪を感得したと云ふことになつて居るが、感得と云ふことも強くないとは申されませんが、感得ばかりではない、矢張りあれが南洋諸島から傳はつたものではないかと思ふ、夫れは役の行者の像を見ても分る、前鬼後鬼が居る、あの鬼と云ふものは、あれはどうしても日本人ではない、

矢張り南洋人ぢやらうと思はれる、今でも其の子孫があると云ふ、大和大峯山を越えるところには村がある、夫れが前鬼後鬼の末孫であると思ふことになつて居るのですが、夫れは南洋諸島からしてさう云ふものが遣つて来た、夫れからして役の行者が、ア云ふ法を傳へられたものではないか知らぬと思ふ。

夫れから奈良の薬師寺へ參詣なさると云ふと、あそこには名高い三尊佛がある、大きな佛様である、始終雨が掛つて濡れて居るやうに、梅雨の時分になると、佛様の腰の處に凹んだ處があつて、ソコに水が溜つて居る、イツ行つても水で洗うたやうに潤うて居る、どう云ふ具合か知らぬが珍しい佛様である、其の佛様のお臺座が大理石ぢやと思ふ、其の臺座の下に裸ッほの鬼のやうなものがすくんで居る彫刻がしてある、あれが矢張り前鬼後鬼と同じ種類ぢやないかと思ふ、熱帯から来た處の者の像であるまいかと思ふ

ふ、あれは一體、誰れがどう云ふ譯で彫つたのであるか、夫れが確かり分らぬ、分るか知らぬが私は調べて居ない、分らぬぢやらうと思ふ。

又法隆寺の塔の中へ這入つて御覽なさい、あそこにテッコロ坊が澤山ある、よく民間に傳はつて居る、誰れが盗んで來たか知らぬが、一つ二つ世間に骨董になつて居るものもある、あれは土で拵へて彩色したものである、白く塗つて彩色が施してある、恰度日本の二歳か三歳位の子供のやうなものである、あれも一體どう云ふものか分らぬ、矢張り、藥師寺の三尊佛のお臺座の下にある裸體の人間と同じやうなものではなからうか知らぬと私は思ふのである。

夫れぢやから此の越知山の泰澄律師、あの人の佛教と云ふものが、矢張り役の行者流の佛法、所謂眞言見たやうなものであらう、あの時分に眞言の法がドコから傳はつたも

のか分らない、あの人に臥行者と云ふものが仕へて居つた、夫れが始終雪の中に寢て居つたと云ふことであるが、變なものである、日本人にそんな者がある譯はない、南洋諸國の熱帶國人が雪の中に寢て居ると云ふもチトをかしい、然らば印度の雪山の山奥あたりから來たものかも分らぬ、兎も角日本人とは思へぬ、泰澄律師は其の臥行者から傳はつたものではないかと思ふ、兎に角さう云ふゴツチャの系統の佛教が日本に這入つて居る、けれどもさう云ふ佛教と云ふものは日本の佛教ではない、他國の佛教其の儘が這入つて居るのでありますから、少しも日本的にはなつて居らない、日本的になつた佛教は即ち欽明天皇の朝に支那から三韓を経て日本へ這入つた佛教である、此の佛教は御承知の通り、百濟王が日本の皇室に向つて貢物として獻上した佛法である、耶穌教の如き、餘所から弘めに來たやうなものぢやアない、此の法は結構な法でござるからして、之を

御獻上申すと言つて三韓から来たものである、日本の皇室に傳はつたものであるからして、そこで佛教のトントの根本と云ふものは皇室のものなんである、民間の人間の信する法ではなく、皇室へ献上した、皇室の御教法なんである、そこで皇室の御許しがなければ、民間の者は信することは出来ないと言ふ資格なものである、それを民間に傳へて、一般の人民に夫れを御推薦下されたのは聖徳太子で、推古天皇の二年であります、攝政の位にお即きなされて直にお出しになつた御詔勅が即ち所謂興隆三寶の詔で、三寶を興隆せよ、佛教を世間に弘めよと云ふ詔である、故に夫れ以來民間に佛教と云ふものが段々盛んになつて来た、聖徳太子御自身に於ても寺をお建てになつた、夫れで皇室の方から人民へ御推薦下されたのは、前にも申した通り、一方から云ふと、是れで國家を鎮護しようと言ふ御思召し、此の佛法を以て日本の國家を鞏固なものにし佛教の威力

で日本の國家を守護して頂きたい、斯う云ふ鎮護國家の法として佛教をお弘め下された、それと共に、又一方に於ては、一般人民の解脱の法として御推薦下されたのである、一般人民が信じて、之れによつて出離を願ふと云ふことになつて来るからして、其の佛法が即ち國家を鎮護する處の力になつて来る、この二つは決して離れたものではない、本當に信仰が出来ぬ以上は、鎮護國家の法になる譯はない、鎮護國家の道具になるのは、即ち一般人民の上に信仰が篤くなつて、其の信仰によつて國家が鎮護せらるゝと云ふ譯になつて来る、之を一つ言葉を換へて申すと云ふと、鎮護國家と云ふのは詰る處、所謂國民道德と云ふものが盛んになつて來ぬことには、日本の國家鎮護と云ふことにはならない、佛法を鎮護國家の法としてお弘めなされたと言ふは、取りも直さず日本の國民道德と云ふものを之れによつて涵養しようと言ふことなんです。

即ち佛法によつて國民が皆篤く三寶のお徳を信じて、御恩報謝と云ふことになつて來れば、そこで國民道徳と云ふものが自然盛んになつて來るのである、國民道徳が盛になり忠孝の念が起ることになればソレが直ぐ國家鎮護である。夫の耶穌教とは振合が大に違ふ、耶穌教なんと云ふものは、國家と云ふ觀念は殆んどない、人類の救済と云ふことを近頃は非常に八釜しく言ふ、人類と云ふことが主であつて、國家と云ふことは眼に著かない、唯だ人間として正直に遣ると云ふ方の側だけを勧めるので、國家の擁護と云ふことには、耶穌教の方の側ではならない、そこで耶穌教と云ふものは、ドコへ行つても、人間の道義心を起すと云ふ方は中々力を入れる、其の方は力があるけれども、國家と云ふ方の側には誠に力がない、近頃は段々妙な事になつて來て、耶穌教徒は大變横著な事を云ふやうになつた、忠孝などと云ふとはモウ役に立たぬ、と云ふやうな事を公然と言

うて歩く、孝行などと云ふことは結構な事であるけれども、惜い事には是れからは役に立たぬ、忠義をせいか孝行をせいか云ふことは、若い者にそんな事が合點の行く譯はない、今日の青年と云ふものを見て御覽なさい、親に孝行をしようの、君に忠義を盡さうのと、そんな考へはありはしない、又それで忠孝など云ふ事を無暗に言つて居つても役に立たぬ、亞米利加の排日の如きも、餘まり忠孝々と八釜しく言ふからあんな事が起つたのぢや、日本人は危険ぢや、あア云ふ奴が遣つて來るとコツチの國の爲にならないと云ふやうな考へを起すから、遂に排日となつて來るのである、斯様の事を耶穌教の連中は八釜しく言つて居る、そんなやうな事になつて居るのであるからして、耶穌教の方の側には、國家觀念と云ふものは殆んどないと言つても宜い位な譯である、けれども佛教の方は初めからして、此の日本の國家を鎮護しようと言ふ所から弘められたので

ある、夫れぢやから佛法で説く所の道徳と云ふものと、世間上に於て説く所の道徳と云ふもの、即ち國家的の道徳と言ふものとは能く一致するのであります、そこで佛法を此の一般の人民に能く弘めて、其の佛法によつて一般の人民の國家的觀念と云ふものを盛んにして、夫れを以て日本の國を擁護して行かうと云ふ、其のお考へからして、聖徳太子が世間に佛教をお弘めになつた、一般人民に御推薦になるやうになつたのである。

其の國家的觀念を盛んにすると云ふことはどうすれば出来るかと云ふと、矢張り自分の出離解脱と云ふ處に心を置いて、其の信念が篤くなつた處で、自然國家道徳と云ふものが起る、早く言ふと、忠孝と言つた處が、自身の出離解脱と云ふ念のない人間であつたなれば、忠孝の實行は本當に出来ない、即ち信念があつて、ソコからして佛恩を報謝すると云ふ考へが盛んになつて來ぬと云ふと、忠孝も道徳も立派な實行は出来ないと云

ふことになる、そこで世間の道徳を盛んにするには、此の佛法の信念を盛んにせんければならない、と云ふ譯である。

夫れはどう云ふ處から、そんな事を言ふのであるか、聖徳太子の上にさう云ふやうな思召しがドコに於て見ることが出来るかと申すと、聖徳太子には、御承知の十七憲法と申すものがある、今日の憲法と同じやうに思はれるけれども、言葉は同じ事でも意味は違ふ、立憲政治的の憲法ではない、マア教育勅語と云ふやうな風のものである、官吏の心得、夫れに兼て、一般人民の心得になることを示し下されたものである、十七ヶ條に分けてお示しになつたからして、十七憲法と云ふ、これは誠に結構なもので、實に今日の教育勅語と共に、一般の人民の、拜讀もし心得もして行かなければならぬものであるのです、ところがさう云ふ結構なものでありながら、今日の人は、聖徳太子の十七憲法

と云ふものを忘つて了つて居る、官吏たるものは素より之を平生服膺せんければならぬこと、思はれるけれども、其の官吏たるもので此の十七憲法を知つて居るものが殆んどないと言つても宜い位である、教育家として、随分立派な肩書を持つて居る人々でも、十七憲法を知つて居る人は至つて少ないやうである、近頃二つ三つ講釋をしたものが出ましたが、大體に於て一般の人が皆んな忘れて了つて居るが、これは明治天皇の教育勅語を拜讀すると共に、十七憲法も一般の者が拜讀して、自身の胸の中に服膺せんければならないものであらうと思ふ、十七憲法を讀んで御覽なさい、誠に結構な事が書いてある、マア官吏の心得が重もになつて居るけれども、夫ればかりでなく、一般の人民の心得と言つても宜いのである、初めから終りまで、實に金科玉條と言つても宜からうと思はるゝ位結構なものである。

第九 日本の佛教 (三)

聖徳太子の十七憲法

十七憲法の一番初めには、一般人民の心得になるトントの根本の處をお示しなされてある、夫れはどう云ふお示しであるかと云ふと、

和を以て貴しと爲し、忤ふ無きを宗と爲す、人皆黨有り、亦達れる者少し、是を以て或は君父に順はず、乍ら鄰里に違ふ、然ども上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひたるときは、則ち事理自ら通じ、何事か成らざらん (漢文直譯)

冒頭のお言葉は、和を以て貴しと爲し、忤ふ無きを宗と爲すと云ふお言葉である、此の意味は、人間と云ふものは調和と云ふことが大切である、衝突をしないやうにするのが肝要である、ところが人には皆徒黨がある、大體の道理に達するものは少い、夫れであ